日韓の真の対話と交流を求めて

2008年度

第５回日韓大学生国際交流セミナー報告書

主催　お茶の水女子大学グローバル教育センター
お茶の水女子大学グローバル文化学環
同徳女子大学校外国語学部日本語学科

日韓の民族衣装を着て

江原道日韓合同キャンプ

韓国の伝統芸能サムルノリを体験

歓迎の横断幕を前に

目　　次

第５回日韓大学生国際交流セミナー概要･･･ 1
森山新（お茶の水女子大学）

研究報告

若者のフアッションについて･･･ 6
伝統建物の比較 ･･ 14
韓日両国の英語教育について･･･ 23
日本と韓国の食文化比較･･･ 33
韓国の軍隊ーアジアの平和を願って私たちが考えたことー･････････････････････････ 40
日本と韓国の美容文化・意識の違い ･･ 52

総括

多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性･････････････････････ 59
西岡麻衣子（同徳女子大学大学院日語日文学科修士課程）
日韓大学生国際交流セミナーの意義について･････････････････････････････････････ 72
金秀惠（お茶の水女子大学大学院生）
第５回日韓大学生国際交流セミナーを振り返って･････････････････････････････････ 86
石井佐智子（お茶の水女子大学大学院生）

総評

体験型交流セミナーの試み･･ 88
金榮敏（同徳女子大学）
日韓の真の対話と交流への重要な新たな一歩･････････････････････････････････････ 90
森山新（お茶の水女子大学）

第５回日韓大学生国際交流セミナー概要

森山　新（お茶の水女子大学）

日時　2008 年 8 月 5 日（火）～12 日（火）7 泊 8 日
場所　同徳女子大学校（韓国・ソウル特別市城北区）
主催　お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環
　　同徳女子大学校日本語科

第５回日韓大学生国際交流セミナーは、８月５日から 12 日までの７泊８日、協定校の同徳女子大学校にて開催された。日本側からは多文化交流実習Ⅲ、Ⅳを受講する 20 名（文教育学部 17 名、理学部１名、生活科学部２名）、韓国側からは 35 名（日本語科 33 名、メディアデザイン学科１名、英語科１名）が参加した。また日本側から指導教員として森山、TA として金秀恵、石井佐智子の２名の大学院生が参加し、韓国側からは指導教員として金榮敏助教授が、TA として申恩淨、西岡麻衣子の２名の大学院生が参加した。

８月５日（火）

12 時 30 分に空港第２ターミナルに集合、スタッフを含め 23 名を乗せた JL953 便は 14 時 40 分に成田を発ち、17 時 10 分、仁川国際空港に到着した。空港リムジンで市内へ向かい、ホテルに荷物を置き、仁寺洞（インサドン）の韓国料理店で歓迎の夕食会が持たれた。韓国側からも多くの参加者がかけつけ、同じグループやホームステイの学生たちとの出会いと語らいの一時となった。

８月６日（水）

ホテルを出発、９時半から大学院 210 号室で開会式がおこなわれた。このセミナーを運営する同徳女子大学の金榮敏先生、そしてお茶の水女子大学の森山が挨拶をし、続いて同徳女子大学の李徳奉先生、石井直美先生が歓迎の挨拶を行った。

引き続きそれぞれが持参した日韓の民族衣装である韓服（ハンボク）と浴衣とを体験するプログラムが行われた。毎回もっとも盛り上がる企画の一つで、今回も着付けのしかたから教え合い、最後には試着した衣装で記念写真を撮影した。

11 時からは場所を東仁館に変え、韓国の代表的な伝統文化の一つサムルノリ体験が行われた。まずはサムルノリのサークル「ソリサウィ」の友情出演のもと、まずは演奏を聞き、続いて４つの楽器の弾き方の手ほどきをうけた。最初は音の大きさにただ唖然とするばかりであった日本側の学生も、次第にそのリズムに聞き入り、さらに実際に自分で演奏することで、韓国の人々が何故にこの文化を愛し続け、守り続けてきたかについて理解を深める場となった。

昼食は学生食堂で歓迎会があり、その後日韓合同のグループ別に野外実習の旅に出発し

た。その夜より日本側学生は韓国学生家庭でのホームステイが始まった。

８月７日（木）

事前に立てられた計画に従い、一日、日韓合同のグループ別野外実習が行われた。

８月８日（金）

午前には引き続き野外実習を行ったのち、午後に同徳女子大学に集まり、野外実習報告会が行われた。活動報告に加え、日本側、韓国側のそれぞれが実習での感想を語り合った。報告会には三浦徹副学長も参加した。最後に参加した各教員が総評を語った。

８月９日（土）

２台のバスにて同徳女子大学の雪嶽山（ソラクサン）研修院へ向かった。渋滞が予想されたため８時に大学に集合、途中雪嶽山国立公園でバスを下車、ロープウエイに乗り、雪嶽山頂上へ。再びバスを走らせ、洛山（ナクサン）海水浴場に隣接した研修院に到着した。夕食まで海水浴場の砂浜で時間を過ごし、夜は洛山海水浴場の海辺でさしみ料理を堪能した。夜は全員が参加しフェアウェルパーティーが開かれ、グループ別に準備した出し物を披露した。日本側は日本の文化や流行、韓国の歌や踊りをおもしろくアレンジし披露した。最後に参加者全員が今回のセミナーの感想を語り合った。

８月 10 日（日）

再び洛山海水浴場で朝食を済ませ、その後バスで移動し、朝鮮時代の両班（ヤンバン）の家屋である江陵船橋荘（カンヌンソンギョジャン）、高麗時代に建てられた五台山月精寺（オデサンウォルチョンサ）を見学したのち、バスでソウルに戻った。

８月 11 日（月）

最終日は自由時間で、各自親しくなった韓国の学生やホームステイの家族と時間を過ごした。希望者は 12 時から韓国最大の日本語学院である時事日本語学院の鐘路キャンパスで日本語の授業を見学した。日本人ネイティブによる会話クラスに１名ずつ入り、海外で日本語を教えることがどのようなことか、垣間見る一時だった。

８月 12 日（火）

10 時に鐘路３街（チョンノサムガ）駅に集合、地下鉄と空港高速鉄道を乗り継いで仁川国際空港へ向かい、13 時 45 分の JL954 便で韓国を後にし、帰国の途についた。猛暑の中で苦労も多かったが、今まで以上に得るものも多かったセミナーであった。

参加者名簿

日本側学生

学籍番号	氏名	所属	学年
0710109	大野　詩衣	人文科学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710124	齋藤　智美	人文科学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710142	田平　祥子	人文科学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710217	大須賀　践奈	言語文化学科　（英文）	2 年
0710239	坂本　美果	言語文化学科　（英文）	2 年
0710240	佐久間　弘子	言語文化学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710269	古谷　寿江	言語文化学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710415	佐川　朋子	人間社会科学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710421	末永　沙織	人間社会科学科　（グローバル文化学環）	2 年
0710427	豊永　優美	人間社会科学科（グローバル文化学環）	2 年
0730602	磯部　美奈	人間生活学科 生活文化学講座	2 年
0730603	井田　千瑛	人間生活学科 生活文化学講座	2 年
0610136	角田　巴奈	人文科学科　（グローバル文化学環）	3 年
0610153	鳳山　成美	人文科学科　（グローバル文化学環）	3 年
0610164	脇川　友恵	人文科学科　（グローバル文化学環）	3 年
0610166	渡邉　さやか	人文科学科　（グローバル文化学環）	3 年
0620506	伊藤　真和吏	情報科学科	3 年
0510233	向後　智美	言語文化学科　（グローバル文化学環）	4 年
0510346	金　　艶	人間社会科学科　（グローバル文化学環）	4 年
0510414	本田　美央	芸術・表現行動学科　（舞踊）	4 年

韓国側学生

氏名	所属	学年
이　미희(Lee Mi-Hee)	日本語科	3年
이　윤희(Lee Yun-Hee)	日本語科	3年
이　은선(Lee Eun-Sun)	日本語科	3年
김　하연(Kim Ha-Yeon)	日本語科	3年
이　정희(Lee Jeong-Hee)	日本語科	3年
김　신혜(Kim Shin-Hye)	日本語科	3年
이　슬(Lee Seul)	日本語科	3年
최　란(Choi Lan)	日本語科	3年
최　선화(Choi Sun-Hwa)	日本語科	3年
곽　무진(Kwak Moo-Jin)	日本語科	3年
김　예솔(Kim Ye-Sol)	日本語科	3年

김　지은(Kim Ji-Eun)	日本語科	3年
박　수지(Park Su-Ji)	日本語科	3年
박　자연(Park Ja-Yeon)	日本語科	3年
윤　미랑(Yoon Mi-Rang)	日本語科	2年
백　선혜(Baek Seon-Hye)	日本語科	2年
정　신영(Chung Shin-Young)	日本語科	2年
오　영미(Oh Young-Mi)	日本語科	2年
이　지훈(Lee Ji-Hun)	日本語科	2年
권　유미(Kwon Yu-Mi)	日本語科	2年
최　미경(Choi Mi-Kyung)	日本語科	2年
서　영(Seo Young)	日本語科	2年
최　수지(Choi Soo-Ji)	日本語科	2年
지　소연(Ji So-Yeon)	日本語科	2年
조　은정(Cho Eun-Jung)	日本語科	2年
김　혜빈(Kim Hye-Bin)	日本語科	2年
박　성희(Park Seong-Heui)	日本語科	2年
성　연승(Sung Yeon-Seung)	日本語科	3年
황　희수(Hwang Hee-su)	日本語科	3年
변　지연 (Byeon Ji-Yeon)	メディアデザイン学科	3年
정　신영(Chung Shin-Young)	日本語科	3年
송　유진(Song Yoo-Jin)	日本語科	1年
김　지현(Kim Ji-Hyun)	日本語科	1年
송　란(Song Ran)	英語科	2年
김　의경(Kim Eui-Kyung)	日本語科	4年

スタッフ

氏名	所属	役職
金榮敏 (Kim Yeong-Min)	同徳女子大学校日本語科助教授	指導教員
森山新	お茶の水女子大学大学院准教授	指導教員
申恩淨 (Sin Eun-Jeong)	同徳女子大学大学院博士課程	TA
西岡麻衣子	同徳女子大学大学院修士課程	TA
金秀惠 (Kim Su-Hye)	お茶の水女子大学大学院博士前期	TA
石井佐智子	お茶の水女子大学大学院博士後期	TA

開会挨拶

グローバル時代の対話と交流のあり方を求めて

森山　新（お茶の水女子大学）

このように韓国を訪れ、皆様にお会いできたことをうれしく思います。皆様もご存じのように先月あたりから日韓両国は領土問題で関係に亀裂が生じています。そのためうちの学生の一部から、私たちの交流セミナーは無事開催できるのかといった心配があがりました。その時、私が学生たちに伝えたことは、私たちのこの交流関係はこのようなことでゆらぐことはない。むしろ国と国とがこのようにぎくしゃくした状態にあったとしても、韓国の学生たち、そしてホストファミリーの方々はきっと皆さんを暖かく迎え入れてくださるであろうということを言いました。これが国際関係とはある意味異なる、人と人との民際交流の意味であり、力です。私たちのセミナーも今回で５回を数え、国境を越え、大学間、そして学生間の関係はますます深まっています。今回の交流でもその関係がさらに深まり、私たちの手により、グローバル時代にふさわしい国と国、人と人との関係が築かれることを祈っています。

これまで日韓両国は世界の他の国々と比べて、比較的単一「的」な言語と文化、民族の環境下に置かれてきました。しかしながらグローバル時代を迎える中、国境を越え、「多言語」、「多文化」、「多民族」が日常的に接触しながら共生していく世界が築かれつつあります。日本や韓国もその例外ではありえません。そうなりますと、自分とは異なる言語、文化、民族に日常的に触れ、それを理解し、共生していく必要が出てきますが、日韓両国はそのことにあまり慣れていない、難しい言葉でいえば言語と文化の「リテラシー（読み解く能力）」が十分に養われてこなかったのではないかと思っています。また日本は昔から、語らずとも相手を理解するといった以心伝心、ハイコンテクストのコミュニケーション文化を有しており、そのために、自身の意見を率直に述べて議論したり、異なる意見に耳を傾け理解したり、多様性を認めたりするといったことが不得意であろうと思っています。この国際交流セミナーでは言語、文化、民族が異なる両国の学生がお互いの言語を学び、それを駆使して意思疎通を行い、互いの文化を理解し合いながら、グローバル時代の交流と共生の道を模索していくものであってほしいと心から願っています。参加者の皆さん、この８日間、多くのことを学び合っていただければ幸いです。

研究報告

若者のファッションについて

向後　　智美（お茶の水女子大学）
鳳山　　成美（お茶の水女子大学）
金　　艶（お茶の水女子大学）
ユン　ミラン（同徳女子大学）
チェ　ミギョン（同徳女子大学）
チョン　シニョン（同徳女子大学）
オ　　ヨンミ（同徳女子大学）
イ　　ジフン（同徳女子大学）
コン　　ユミ（同徳女子大学）
ペク　　ソネ（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

日本のファッションは地方と東京の差が大きいと分かっていた。東京の女性たちに比べて大阪女性たちは原色が好きでメイクも濃くすると聞いたからだ。釜山のように遠い所に住んでいる人もわざわざソウルまで上って来て服を買う場合があるし、ネットで服などを買っているのでソウルと遠く離れている所に行ってもスタイルの差は感じることができない。そして日本人たちのスタイルを見ればとても普通のスタイルをしていてもポイント的なアイテムをすることとして自分のスタイルを他人達と違うようにするというイメージがあった。韓国で日本人を見分けることができる方法の中で一つがファッションによるが、例えば真夏にもブーツや黒ストッキングをはいて歩く人のうち 99%が日本人というのだ。また日本の雑誌を見れば原宿みたいな所には非常に珍しいスタイルをしている人々がたくさんいたが、 韓国では平均とひどく違う服を着る人々がいないので新鮮だと思ったし、同時に「なぜ日本には珍しいスタイルをする人々が本当にたくさん存在するのだろう？」という疑点が生じた。また最近韓国では日本のファッション雑誌を見る人々が増えているが、どうして韓国の女性たちは日本のファッションを真似したがるのだろうか？という疑点を持つようになった。 そして、それなら韓国と日本のファッションの差にはどんなものなどがあるかという思いが生じてこのような主題で進行するようになった。

街を歩く人々を見ていると、なんとなくではあるが、あの人は日本人ではないだろう、おそらく韓国人ではないか、と感じることがある。はたしてその原因は何なのか観察し考えたところ、洋服の着方に違いがあると思った。日本にいて日本で洋服を買っても、日本人の服の選び方・着方と、韓国人のそれは異なっているように感じる。その理由を少しでも知りたい、また、韓国のファッションはどうなっているのか、テレビや人の話を経由し

たものではなく自分たちの目で実際に見てみたいと思い、今回のテーマを決めた。また、ファッションといえば若い女性ならば誰でも興味を持つ分野である。興味を持ち自分なりのこだわりを各自が持っているものを調べることで、よりお互いを深く知ることができたらよいという希望もあり、日本と韓国の若者のファッションについて調べることにした。

2. 事前調査

2.1 日本側

街にいる人の写真や友達の写真を集めた。写真を見てわかったことは、ワンピースやスカートの下にレギンスやパンツを合わせていたり、ベストやパーカーを羽織ったりと重ね着が多いということである。

韓国と日本それぞれで、同じ値段で洋服を準備したらどのようにスタイルの違いがでるかということを調べるために、事前にアクセサリーなどもいれたトータルコーディネトを準備した。小花柄のワンピースにカーディガンとレギンスをあわせた、日本らしいスタイルにした。

日本の代表的な雑誌である、non-no を用意した。日本の雑誌は、コーディネートを紹介しているものが多く、一週間着まわし術などといった特集がよくくまれている。そのほかに 20 代の女性が関心をもつ、ダイエットや占いなどの記事も載せられている。韓国の雑誌は、カタログのように洋服だけが載せられているもの多いようで、大きな違いであるということがわかった。

2.2 韓国側

日本学生たちと一緒に見学する所は明洞、東大門のように最近韓国ではやりの服スタイルを易しく分かることができて、同時に服屋が多い所を選定した。

韓国側で企画した「同じ貨幣価値で韓国と日本で服を購入した時スタイルがどんなに変わるか？」を行うために、日本の 109 と同じく若い女性たちがよく訪ねる明洞のミリオレという所を選定した。この計画を作る時には「アイテムをいくつ購入することができるか？」が中心だったが、実際に服を購入してみるとアイテムの数はほとんど同じだったが、スタイルの方で多くの差があった。初めの意図とは行き違ったが面白い結果だったと思う。

東大門には明洞などファッション通りで服を送る卸売りの街並たちが集まっている建物があるので、釜山などのように遠い所で服屋をする人々が夜明けにその建物で尋ねて来て服を大量に購入して帰る。日本にはこんな所がないかも知れないと思ったから東大門も見学した方が良いと思った。韓国人である私たちの中でも初めてその所に行った人々もいたが、価格が非常に安かったので驚いた。

そして「韓国にある日本ブランドはどんな差があるのか？」という知りたいことがあったので、韓国にある代表的な日本ブランド「ユニクロ」の売場を訪問することに決めた。売っている服は同じだが売場に展示して置く服のスタイルが違うと思ったからだ。

最後に日本、韓国のファッション雑誌を比べる時間を持つ事にしたので韓国 20 代初盤女子大生たちが楽しんで見る韓国ファッション雑誌である CECI を準備しておいた。

3. 韓国での野外実習

８月６日：歓迎会後に仁寺洞のカフェに移動し、お互いが事前に用意してきた資料（雑誌・写真）の確認をおこない意見を出し合った。翌日以降の予定を確認し、夕食後解散し各自帰宅した。

８月７日：11 時に明洞のロッテデパートに集合し、レディスファッションフロアを話し合いながら見て回った。昼食後は店が密集し若者でにぎわう明洞の中心へ移動し色々な店を見て回った。その際に、韓国側グループの数名が 10 万ウォン以内でのコーディネートを探し購入した。16 時ごろに明洞のユニクロ店舗を見学。夕食後に東大門へ行き洋服の卸売市場を見学した。その後は数名でチムジルバンに宿泊した。

８月８日：10 時半に学校へ集合し、日本側は原宿竹下通りで、韓国側は前日に明洞で用意したコーディネートをそれぞれ比較した。これまでの実習で見たものについて討論し発表準備をして報告会に臨んだ。

4. 調査結果

時間順に追って結果を報告する。

韓国の雑誌は商品を紹介するという性格が強く、本当にカタログのようだと日本側から意見が出た。しかしながら雑誌後半部には恋愛の話や占い、スキンケアの方法が掲載されていて、日本と変わらぬ部分も見られた。また、韓国の雑誌では有名女優の写真を掲載したグラビアのようなページが多く、日本の読者モデルのような人はいないようだった。日本の雑誌は、韓国側が指摘したとおり着回し紹介の記事が多い。ブランドと協力した商品紹介ページもあるが、そこでも色や形の組み合わせについての説明がなされ、あまりカタログ的には見えない。専属モデルや読者モデルの存在に加え、街で見かけた一般人の写真なども掲載されているためより実用的､読者である一般人に寄り添った内容になっている。読者が｢着る｣ことを想定し構成されているため庶民的な印象を受ける日本の雑誌と違い、韓国の雑誌は洗練されたファッションを「見る」ことに重きを置いているように感じられた。同時に日本で事前に撮影した女子大生の写真を見てもらった。レギンスなど重ね着をしている日本学生がとても多く、重ね着が日本と韓国のファッションの違いになるのではないかと予想していたが、韓国でもレギンスを着用する人は多くそう珍しいことではないということだった。

ロッテデパートでは、店内で販売されている服は日本でも売られているようなものばかりだった。しかしながら細かく観察すると違いもあり、店舗どうしの間隔が狭く全体的に詰まった印象を受けることと、店の棚ごとに置いてある服の数が多く日本のデパートのようなゆったりと買い物できるという印象はなかったことがあげられる。日本でも有名なブ

ランド「OLIVE des OLIVE」の店舗を見つけ、よく知っているブランドということで比較してみたが、日本では主に女子高生など10代後半から20代前半の学生層が中心の若い女性をターゲットにしているのに対し、韓国では働く女性が着こなす服を取り扱っていた。日本で売られている服とは方向性が違うため、後述のユニクロとは違う戦略をとっているようだった。また、日本では同じフロア内でも、系統が似た店舗を集めて配置しフロア全体を見やすくまとめている場合が多いが、ロッテデパートでは系統ごとに店舗を集めているようには見えなかった。

一方、明洞のユニクロは、４階建てのビルの内部すべてが店舗であるという形態を除けば、品物、価格、展示方法など何一つ日本と変わりなかった。事前にユニクロに質問をしたが、「日本と韓国では違いはない」という趣旨の回答を受けており、それを自分たちの目で確認する形となった。しかし、通貨レートに関係なく、（日本円価格×10）ウォンでの価格設定がなされているため、日本での手頃な普段着という捉えられ方と異なり、韓国ではユニクロは日本製の高級品と捉えられているとのことだった。また、繁華街でいくつかのアパレル店舗を見学したが、流行の違いがあるので細かな点では珍しいものもあったが、日本でも売っているだろうと思われる服が多く、若者のファッションという面においては日本と韓国に明確な違いはないという意見で私たちはまとまった。

東大門にある服の卸売市場は、夜の９時前後に開き、夜通し服を安く売っている。店舗経営者などが買い付けにやってくるようだ。遠方からの買い付け客も多く、遠方の地名が表示されたバス停があった。卸売市場が近いためファッションテナントが入った商業ビルも多く、夜遅くまでにぎやかで明るかった。鮮魚や青果などの卸売市場は日本にもあり存在も多くの人に認知されているが、東大門のような服の卸売市場のような存在は、日本にもあるのだろうが一般の人には知られていない。インターネット上などで「工場直販」などという宣伝を見ることから利用できないことはないのだろうが、実際に店舗経営者などと同じ場で買うということはできない。存在が広く知られているという点と、誰でも利用できる開かれた卸売市場という点が日本とは異なる。

「日本では重ね着が多く、韓国では原色など派手な色のものを好む」という仮説を立て実習に臨んだが、実際に街を歩き友達や他人の服装を観察してみると、日本よりカジュアルな格好をしている人が多いとは感じたが、明確な違いは見つけられなかった。ユニクロに代表されるように日本から韓国のアパレル市場に参入し成功を収めている企業がある一方で、渋谷109内に店舗を構えるアパレル会社が韓国東大門から服を仕入れ日本で販売するなど、日本と韓国の間で双方向的なファッションの流れがあることが関係しているのではないか。また、日本人と韓国人を見分けるときに私たちが判断材料としているのは、服装よりも髪型や髪色・メイクなどの要素のほうが強いことがわかった。日本人は大学生ともなると大半の人が染髪をおこなうが、韓国では黒髪ストレートが好まれており染髪していない人がほとんどだった。また、ファッションの違いとは言えないかもしれないが、日本での違いがあった。カップルのペアルックである。韓国ではペアルックをするカップル

が多いということで、一時期流行していたが今やするカップルはとても稀になってしまった日本とは異なっていた。

5. 考察

5.1 日本側

私たちは街を歩いているとなんとなくの感覚であの人が絶対日本の人ではなく、韓国の人であると正確に判断できる場合が少なくない。このなんとなくの感覚の由来がファッションの違いであると私たちは思っていた。韓国の若者はだいたいどんな洋服を着ているのか、それは日本の洋服とどこが違うのかに興味を持ち、今回のセミナーにあたって、若者のファッションについて調べることにした。しかし、実際韓国に行ってデパートなどのアパレル業界を見てみると、驚きの事実を発見した。日本と韓国で売っている洋服はほとんど同じで、日本で売っている洋服は韓国でも普通に売っている。洋服を見る限りではこれが韓国のファッションだと判断できるスタイルはなかった。つまり若者のファッションについては日本と韓国に明確な違いはないという結果が出た。これが私たち最初に想定したこととはまったく異なった。では、私たちはなぜ韓国の人だと判断していたのか？韓国側の学生と討論を進むなかで、新たなことに気づいた。私たちが韓国の人だと判断していた要素は服装だけでなく、ヘアスタイルやコーディネートのしかたなどさまざまな要素があり、それらを合わせて総合的に判断していたということがわかった。たとえば、日本人の大半が髪を染めているが、韓国では黒髪ストレートが好まれており染髪していないのがほとんどである。コーディネートのしかたにおいては、日本の人と韓国の人が同じ服装を着るとしても、日本のほうがアクセサリーをつけたりなどの工夫をして、ワンポイントをつけるのが得意である。このように私たちは韓国の人であると判断していたとき、服装よりもそれ以外の要素のほうが判断材料としてみていたのではないかと思う。

次に、両国のファッション史を見てみることで類似点・相違点を見出したい。以下に両国ファッション史のおおまかな流れを簡潔にまとめる。

日本に洋服が入ってきたのは明治維新による文明開化であった。1870 年の陸軍軍服制定、1871 年の断髪令、1876 年の廃刀令などによって断髪・廃刀・軍服が制定され洋装化が進み、軍人だけでなく警官や車掌などの男子の制服として定着していった。

1894 年日清戦争と 1904 年日露戦争ののち、戦勝気分と好景気により洋服は政府高官・富裕層から一般層へと広がっていった。通勤着や通常着として背広が普及したのはこのころであり、男性の洋装化は一気に進んだ。

一方、女性においては和装が未だ中心であったが、1910 年代に女性が職場進出しバス車掌や電話交換手として働き始めると、その制服として洋装が採用された。女性の洋装化を一気に推し進めたのは 1923 年の関東大震災である。機能的な洋装化が促され、銀座にモガ・モボが出現した。それでも和装の女性が圧倒的に多かったが、和装にもアールデコ模様が取り入れられるなど和装も新たな展開を見せていた。また、大阪の主婦層からアッパ

ッパといわれるシンプルなワンピースが生まれ、やがて女性の室内着・普段着として広まった。

1940 年代に入ると、成人男子は軍服に似たカーキ色の服、女子はモンペ姿が定番となった。戦後、帰還兵たちのほとんどは軍服のままであったが、女性においてはパンパンガールスタイルを真似た派手な原色を用いるアメリカン・ファッションが登場したり、戦後生まれの若者のあいだでもアメリカン・ルックが流行していた。

50 年代には戦後の混乱がおさまりつつあり生活が落ち着いてきたため、機能的なアメリカン・スタイルよりもパリモードに人気が集まった。外国崇拝の風潮を背景に外国映画の俳優たちのシネモードに影響を受けたファッションが流行した。

60 年代に入ると「もはや戦後ではない」という経済白書を背景に高度経済成長期を迎え、新三種の神器が人気を集めた。ミニスカートなど斬新なデザインが話題となる一方で、「みゆき族」「原宿族」などの若者独自のファッションも生まれていた。

70 年代には 60 年代のシンプルで体にぴったりとフィットするデザインの反動からゆったりしたシルエットのビッグルックが基本となる。このころには「an-an」「non-no」などのファッション誌が創刊され、外国のものを取り入れるのでなく日本独自のファッションも生まれた。

次に韓国のファッション史を見てみたい。19 世紀末、近代化の流れの中で 1895 年の断髪令とともに洋服の着用を許可する服装規定を発布、1900 年には官服を洋装化した。この断髪令がきっかけとなり、韓国の衣食住は変化し始める。

洋装化初期、ほとんどの人達は韓服に帽子や靴などの西洋のアイテムを組み合わせた半洋装であった。韓服じたいも実用化され、チョゴリを長くしチマを短くした改良韓服が女子のあいだで流行した。その流行と同時に洋服の着用も増加していった。新教育を受けた女性たちの増加に加え、洋裁学校・新聞・女性団体などにより洋裁の講習により洋服の着用が拡大、男子においても 1920 年代から背広の着用が一般化していった。

1940 年代から 50 年代初めまでは男子は国民服、女子はもんぺを着用していた。1950 年から 1953 年の休戦協定までの朝鮮戦争後、社会混乱のなかでアメリカ文化が受容されていった。1905 年にはじまり日用品市場として存続した東大門市場は戦後も復活し古着交換や舶来品・密輸品販売で再開された。故郷を失った北朝鮮の人々が現在の東大門平和市場で店を開き始め、1969 年には新平和市場はじめ東平和、南平和、第一平和などの市場がそろい国内服飾産業の成長、既製服の拡大に大きな影響を及ぼした。戦後、洋服の需要が爆発的に増えたが既製品の品質は粗悪だったため、オーダーメイドが人気だった。高級洋裁店が多く集まる明洞はその流れのなかで流行を先導する街となった。

1950 年代後半には『女性界』『女苑』が創刊され、ファッションにたいする関心が高まった。また、戦後、映画が娯楽として人々のあいだで流行し、映画スターのファッションを真似る人も多かった。

経済規模が拡大した 70 年代には高速道路が各地に建設され都市化が進み、アパートの建

設が行われた結果、スーパーマーケットやインスタント食品など新しい住居形態や生活様式が生まれた。婦人服メーカーが相次いで登場しアパレル産業が本格化し、1979 年にはロッテデパートが開店するなど流通機構にも変化が見られた。

生活様式が欧米化し洋服の着用率が上がると、韓服は礼服となり脱ぎ捨てられる傾向にあった。韓服は行事や冠婚葬祭などのための伝統衣装となっていく。

日本と韓国では、欧米文化の流入時期には 40 年ほど差がある。両国とも戦争を経験し、その過程で洋装化とは逆の流れが起きていた時期はあるが、興味深いのは戦前の様子である。廉（2003:118）によると、韓国では男性だけでなく女性も同じように洋装化していったという。日本では同じころはまだまだ和服の女性が圧倒的に多かった。シネモードの流行などの時期はあまり差がないが、女性誌の創刊などの時期は韓国のほうが早く、女性の啓蒙とそれに伴うファッションへの関心の高まりは韓国のほうが早かったと言えるだろう。洋装化の流れの開始と戦争による停滞期がほぼ同時であるにも関わらず、である。

廉（2003:125）によれば、韓国のファッション文化について日本と大きく異なるのはほとんどの大学にファッションに関連する学科（専攻）がある点である。四年制大学 77 校で 4096 名がファッション学科で学んでいる。短期大学や専門学校を合わせると毎年一万人以上もの人材が輩出されることとなる。日本では四年制大学でファッションについて学べるところはほとんどないといってよい。ファッションについての教育制度の充実、若いデザイナーの育成を目的とした「大韓民国繊維ファッションデザイン・コンテスト」の 1983 年からの開催など、国をあげてファッション産業に取り組んでいることが、日本と韓国のファッションの最大の違いとしてあげられるだろう。

5.2 韓国側

韓国の若者達が思う韓国と日本の最大の差異の中で一つは若者達のファッション文化だ。日本だけの独特のファッション文化はもう全世界的に有名だからだ。それで多くの韓国人たちは日本のファッション文化を韓国のとは全然違うように思ったりする。私たちもそんな考えを持って今度のセミナーに参加したが、お茶大の学生たちとあちこちへ行って調査して見た結果、韓国と日本がとても似ている服を売っているという事実が分かって驚いた。服には別に差がなかったのだ。ただ、その服を着る方法に差があったのだ。この事実が分かってからセミナーのあとでアメリカ人たちとイギリス人たちなどのファッションも関心を持って調べてみたが、韓国と日本でも売っている服を着ていた。その服をその国の文化に当たるように着るのかに差があるというのが確かになった。日本側が準備して来た日本の若者達の写真を見て一番印象深かったことは履物だった。韓国では夏には絶対ブーツをはかないのに、日本の人々は季節にかかわらず多い人々がブーツをはいていた。また、韓国では「女らしい服には女らしい靴、カジュアルな服にはスニ―カー」と一緒に「こんな服にはこんな履物」という暗黙的な規則があって、そんな規則を破る人がほとんどいないのに、日本の人々はそのようなことからかなり自由なことを見て驚いた。日本の人々

の写真を見た時、履物を見た瞬間にもっとも「日本人っぽい」と感じた気がした。ヘアスタイルに対する話は美容に関することだから短く言えば、韓国人たちの女性の理想的なヘアスタイルは黒い色の長いストレート髪の毛だと思うから、他の色で染め付けをする人々もいるが、日本人に比べるとあまりいない。しかし日本人には黒色の長いストレートの髪の毛は極めて珍しいことが分かってびっくりした。

＜参考文献＞

横田尚美（2003)『ファッションを考える』丸善株式会社

城一夫・渡辺直樹（2007)『日本のファッション　明治・大正・昭和・平成』青幻舎

生活文化研究所（1990)『衣服人類学―「日本人の装い文化」と 21 世紀ファッション』啓文社

財団法人日本色彩研究所（2007)『日中韓常用色名小事典』クレオ

林鎬根（2005)『韓流の源』光人社

在日本韓国文化院（1994)『日韓文化論』学生社

色とファッションに関する日韓中の若者の意識と実態について　財団法人日本色彩研究所（9 月 10 日アクセス）http://www.jcri.jp/hiroba/buhou/142.htm

研究報告

伝統建物の比較

井田 千瑛（お茶の水女子大学）
大野 詩衣（お茶の水女子大学）
古谷 寿江（お茶の水女子大学）
磯部 美奈（お茶の水女子大学）
金　信惠（同徳女子大学）
李　スル（同徳女子大学）
李　政姫（同徳女子大学）
崔　蘭（同徳女子大学）
崔　瑄化（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

1.1 日本側

私たちのグループは伝統文化について調べることにしました。日韓両国は現在では先進国として経済的にかなり発展している国であり、二つの国は似ているところがかなりあります。そうした状況のなかで韓国の現代の姿は実習をしなくてもある程度とらえる事ができると思いましたし、また現代の韓国の日常生活に関わる慣習や習俗、さらにそれを支える芸能、道徳、宗教、政治、経済といった社会構造は伝統文化に深くかかわりがあり、伝統文化を学ぶことで昔の韓国の姿だけではなく現代の韓国の姿をとらえる手がかりにもなるのではないかと考え、伝統文化について調べようと思いました。

そして伝統文化のなかでもとくに伝統的な建造物に焦点を当て、調査することにしました。歴史的建造物はそこに使われている色彩や建物のつくりなどに、その時代の人々の生活習慣や文化だけでなく精神や宗教観も表れていると考えたからです。また自分と異なる文化を持つ人との相互理解のためには、まず自国の文化を見直して正しい理解をし、相手の文化も相違点、類似点全て含めて肯定的に受け入れられる姿勢をつくることが大切だと思ったので、韓国の伝統文化だけでなく日本の伝統文化についても調べました。そして日本と韓国における建物に込められた思いの類似点と相違点、韓国の宮廷貴族と庶民の生活の類似点と相違点を探ることにしました。

1.2　韓国側

私たちは韓国の伝統生活文化の中でも韓国の建築についての調査を行いました。他の国の文化を学ぶということは、まず、その国に対する伝統文化を学ぶのが一番だと思ったのと、我が国にもこんなに立派で美しい文化があるということを外国人に知らせなければならないという使命感もあったからです。またこのセミナーを通じて我が国の素敵な文化を

知らせることで外国人たちが韓国文化に触れるきっかけになったら良いのではないかと思ったからです。

伝統生活文化でもさまざまな文化が含まれているのに、その中で建築について調査することに決めた理由は、建築物にはその国の地形，気候，地域的特性，文化が反映されていると思ったからです。

建築を見ながら我が国の生活がどうだったのかを知るだけではなく、建築物に内包される意味を感じることで、韓国人の情緒に対して近付くことができると思ったから、このタイトルに決めました。私たちは建築の中でも両班の生活と庶民の生活を比較して、その中で民俗信仰をもっと調べる事にしました。両班の生活については両班家と宮を調査する事にし、 庶民の生活については韓国の農家を体験する事にしました。日本も同様に日本の宮と日本の民家を比較し、神社と寺院も一緒に比較しました。

2. 事前調査

2.1 日本側

建物はやはり見学するのが一番だということで、7 月 26 日に護国寺、小石川後楽園、湯島天神、皇居、浅草寺を見学に行きました。建物とともに庭も造り、その庭も含めて日本的空間を作り出しているだろう、との考えから、小石川後楽園も見学コースに含めました。

あらかじめインターネットでそれぞれの施設の概要を把握した上で調査に向かいました。

護国寺は江戸時代に五代将軍綱吉によって立てられた寺で、本堂は戦火にも堪え現在も建立当時の様相を保っています。ここでは、本堂の梁の装飾と石灯籠の彫刻に興味を持ちました。小石川後楽園も江戸時代から残る庭園ですが、中国趣味を取り入れた庭園ということがわかり、しかも建物とのつながりもつかめなかったためあまり参考にならなりませんでした。次に訪れた湯島天神の社殿は平成 7 年に改築されたものですが、伝統的な「権現造り」の建築様式が用いられ、建築材も日本古来の「木の文化」を象徴する木曽檜です。外観は赤を基調とし、壁には緑や青、黄色で彩色された装飾が付けられていました。元々私たちは「韓国の建物は色彩が豊か」というイメージを持っていたので、この社殿の色彩は実習での良い比較材料になると思いました。また、防災面の不利があっても伝統の建築材を用い伝統的な建て方をする、信仰心とそれを建物にまで追求する（一部の？）日本人の精神を感じました。皇居は見学できる建物がなく、ここも建物の参考にはなりませんでした。最後に訪れた浅草寺では、建物の造り以上にその建物と人々との関わりに注目してしまいました。628 年の建立以来、度重なる火災にもかかわらずその度修復・再建されたこと、正面口へ向かう通りに仲見世通りが発達したことは、仏教の祈りの場としてはもちろん、この寺が生活の一部にあったことの表れとも考えられます。今でこそ仲見世通りには観光客相手の店が多いですが、履物屋や洋品店があるところを見ると、門前町として栄えたかつては周辺の住民が生活用品を買う姿も見られたでしょう。街が出来たということは、そこを訪れる人がたくさんいたということで、観光が容易に出来なかった時代、寺が

宗教の場として本当に力を持っていたことがわかりました。

この事前研修によって、韓国の建物と比較したい点（屋根や梁の装飾、装飾を含めた建物全体の色使いなど）が明確になりました。

また、研修地についても、韓国側から教えてもらったサイトと共に日本語のサイトも探し、インターネットで情報を集めました。韓国の伝統的な建物が、秀吉の朝鮮侵略や韓国併合時に日本によってたくさん失われたことを知り、大変心が痛くなりました。

2.2 韓国側

建築と係わる伝統文化を体験するためには多くの所に行って建築物を見て、その中で韓国の文化を体験しようと思ったのですが、私たちに与えられた時間的余裕がそんなに多くなかったため三つの所位に分けて見ました。まず 6 日は野外実習の時間がそれほど多くなかったのでロッテワールド民俗博物館に行く事にしました。ここには歴史展示館，模型村，体験学習などさまざまなことを一度に見ることができるように作られている所です。私たちは事前に博物館に電話をして体験活動に対して問い合わせをし、外国人のためにやっているプログラムはないのか調べておきました。まず、歴史展示館では韓国の先史時代から高麗時代までの生活を見られるように展示してありました。各時代別の服とその時代に使われた道具が展示されており、我が国が昔どのように生活していたのかが分かるきっかけになりました。模型村では模型で作られた家屋が時代別に一目で特徴をつかむことができるように展示してありました。ロッテワールドでは扇作りや陶磁器作りなどのさまざまな体験活動ができたし、韓国の歴史を易しく見られる模型歴史展示館もあったので、その後行くことになった韓国民俗村や景福宮の事前知識を得られるいい所だと思いました。

次に韓国の民家を代表する所として韓国民俗村に行くことを決めました。地域による家の様式の違いや昔の韓国の人々の生活様式を見られる韓国民俗村は、見ることも多かったし、いろいろ体験することも多かったので一日をかけて回る計画を立てました。この民俗村では韓国の伝統的な両班家と民家を見回すことができるし、そこで先祖たちが楽しんだ農楽や網渡り，板跳びなどを直接的に身で体験することができます。また韓国の各地域の建築の模様がどう違うかということや韓国の民俗信仰はどうかなどを学ぶことができます。しかし、それぞれの建築物が位置している所があまりにも遠かったためインターネットで情報を収集してコースを見てまわることで満足しました。

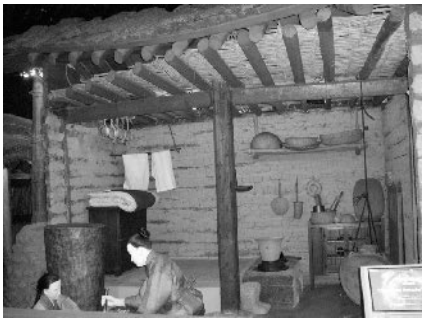
韓国の宮廷を代表する建築物として景福宮を見学場所に選択しました。景福宮を選択した理由は、韓国の多くの宮廷の中でも一番最近まで使った宮であり、ソウル市内にあり位置も近いこと、また日本側の学生たちも見たがっていたからです。しっかりとした調査をするため私たちは景福宮に事前踏査に行きました。先に行って各建物がどのように使われていたのかを調べ、セミナー当日に歩きまわるコースも調べました。また景福宮のすぐそばにある国立民俗博物館にも行ったのですが、先に行くロッテワールドと重なる部分があり時間上の問題もあったので景福宮の見学のみにすることに決めました。ほかに守門将交

代儀式をする時間も調べたり、より正確な情報を日本側の学生たちに知らせるために日本語で景福宮を案内してくれるツアーも問い合わせたりしました。

その他にセミナー期間中には行かなかったけれど、調査日程に含むか含まないかを決めるためにナムサンゴール韓屋村にも行って来ました。景福宮を見た後ナムサンゴール韓屋村へ行く予定だったのですが、二つの場所を全部行って見るのにはあまりにも時間が足りないし韓屋村にある内容は民俗村でも見られると判断してセミナー期間には行かないことにしました。

3. 韓国での野外実習

実習初日の８月６日は午後のみの実習で時間が短かったため、ロッテワールド民俗博物館のみを見学し、先史時代から日本占領時代までの韓国（朝鮮半島）の歴史を概観しました。「体験して理解する」をコンセプトに作られた博物館なだけあって展示のあちこちに体験コーナーが設けられており、農民が使っていた道具を使ってみたり伝統的な遊びをしたりと、体を使って楽しみながら歴史・文化を知ることが出来ました。また、歴史展示室の伝統家屋とそこでの生活を再現した展示も素晴らしかったのですが、模型村の 1／8 立体模型の展示は圧巻でした。精密に作られた建物と今にも動き出しそうに生き生きとした表情の人形たちが、翌日からの実際の建物見学により期待を抱かせてくれました。



左上：民族博物館入り口

右上：高句麗時代の民家の再現

左下：模型村の「景福宮の宮中儀礼」

翌７日はソウルから少し足を伸ばして韓国民俗村に行きました。ここでは主に、実際に建てられた民家とヤンバン（貴族）の住まいの比較、そして内部に展示されたものを通し

てそこでの生活の比較も行いました。また、日本で事前に調査した護国寺との比較には、村内にある金蓮寺を対象としました。ロッテワールド民族博物館同様、要所要所に体験コーナーがあり、加えて、民家内で実際に綿花や蚕から糸を紡いでいるところや、農楽ノリ・伝統婚礼式も見られて、建物に限らずたくさんの韓国の伝統に触れることが出来ました。

左上：金蓮寺の梁

右上：農楽ノリ

左下：伝統婚礼式の様子

野外実習最終日の８日は、五大宮の一つ、景福宮を見学しました。見学できたのは宮中の中心の一部分だけでしたが、日本語ガイドの方の案内でそれぞれの建物の役割や造りの特徴を掴みながら見られたので、王族の好んだ様式や前日見学したヤンバンの住宅との違いなどもわかりました。特に色使いが日本の建物と大きく違うところのように見えたので、どの建物も外装・内装の色使いをよく観察しました。

前頁左：勤政殿

前頁右：慶会楼

左下：勤政殿より光化門方面を望む

以上 3 日間の実習で、朝鮮の民衆・貴族・王族と身分による建物と生活の違い、韓国の伝統的な建物と日本の伝統的な建物との類似点と相違点を知り、同時に韓国の伝統文化に対する知識を深めることが出来ました。

4. 調査結果

私達は今回行った調査において、両国の建築に施された色彩に注目しました。ここではその調査結果を、韓国と日本の色を取り上げることで対比的に見ていきます。

事前調査において、護国寺と浅草寺、そして皇居等を見学しました。その結果から、日本では寺社のみならず、邸宅や城でさえも鮮やかな色彩はみられず、主に暗色を基調としていることがわかっていました。しかし、それらは色が無いからといって、私達が目を向けないような魅力の無い存在であるというわけではなく、落ち着きの中に厳格な雰囲気や重々しい威厳が感じられるものでした。

韓国での調査においては、それと対照的な観察結果が得られました。景福宮は王朝が築いた最高峰の豪華さを誇るが、その色彩の鮮やかさは目を見張るものです。

青、赤、黄、白、黒の五色が基本として使用されるが、この伝統的彩色は陰陽五行説に由来します。

陰陽五行説とは、「陰陽思想」と「五行思想」を組み合わせたものです。「陰陽思想」は、全ての事象はそれだけが単独で存在するのではなく、「陰」と「陽」という、相反する形で存在し、それぞれが消長を繰り返す、という思想です。一方、「五行思想」は、万物は「木火土金水」の５つの要素により成立する、というものです。青、赤、黄、白、黒の五色は、三原色に全反射と全吸収の白と黒を加えたものです。それらは究極的には宇宙の万象を消長することとなるといいます。

さらに、これらの色は丹青とよばれ、施すことにより風格を与えると同時に、建物自体の保護ともなります。それらの色を駆使してつくられた連続模様は、果てない程に繰り返され、韓国建築独特の豪華絢爛さがよくあらわれています。

この二国の色彩を比べてみて見えてくるものは、両国における価値観の違いです。

先にも述べたように、日本では重みのある色が好まれ、色鮮やかな要素は無いに等しいと言えます。これは、清閑なる空間を追い求め、それを高貴であるとし、やたら色使いの激しいものを「派手」と蔑む日本の心理を示すとも言えるでしょう。

それに対し、韓国では豪華であればある程に、威厳あるものとする価値観を持っています。これはできる限り色をふんだんに使うことによる、人々が目を向けずにはいられないほどの積極的アピールであると言えます。

ここからわかることは、韓国と日本の持つ美意識、そして性格の違いである。鮮やかな美を求める韓国人と静かな美を求める日本人、そして、大胆な韓国人と控えめな日本人という精神的差異が、建築物上でも如実にあらわれているのです。

5. 考察

5.1 日本側

私達が韓国の建築物を見学して一番に気づいたことは、色彩の使い方の違いです。日本の建築物は、木や白壁など、素材を生かした地味な色合いをしたものがほとんどですが、韓国の寺や宮殿は、鮮やかな赤・青・黄を基調とした模様・装飾で彩られていました。
日本では、わび・さびといった言葉があるように、質素なもののなかに美しさを見出す文化があります。現代社会においても、あまりに派手なものや豪華絢爛なものは煙たがられ、人々は日々の暮らしの中に中間色を取り入れようとします。それとは対照的に、韓国では、原色や鮮やかなはっきりとした色が好まれるようです。私達は、このような違いは、単なる好みの違いというものではなく、日本と韓国の国民性の違いから生まれるものなのではないかと考えました。つまりそれは、大まかに言ってしまうと、「集団主義・没個性に馴染んだ日本人」と「個人主義の強い韓国人」という違いです。

私は、ホームステイ初日に、韓国人学生に「日本人は、いつもにこにこ笑っているけれど、あまり喋らないし、自分の本音を話さない。何を考えているのかわかない人というイメージがある。だけど、韓国人は、自分の思っていることを話すし、他人のこともずばずば聞く。」といった内容のことを言われました。実際に、韓国で一週間過ごすなかで、そのような日韓の違いを感じました。その他にも、街を歩いている韓国人の人がとても大きな声で話していたり、鮮やかな色の服を着ていたりなど、全体的に日本よりも個々の主張が強いという印象を受けました。このような韓国人の性格・国民性が、美意識にも通じており、寺や宮殿に関しても、鮮やかな色彩や模様・装飾によって他とは違う個性、美しさを表現したのではないかと思われます。

日韓の建築物には、相違点ばかりでなく、共通点もありました。その中でも特に、両者とも「自然との調和」を大事にしていることに気付きました。日本の造園法に、「借景」（庭園外の遠山や樹木をその庭そのものであるかのように利用してあること）というものがありますが、雄大な山々を背景に従えた景福宮を目にしたとき、日本の借景と似たような要

素を感じました。景福宮は、もちろん建物それだけでも大変美しいですが、あの山々と調和している姿がなんとも素晴らしい光景でした。韓国は山が多い国で、国土の７０％が山だといいます。山は韓国人の自然感の形成に大きな影響を与え、韓国の伝統建築には山や自然環境に調和する建築配置と空間が内在していて、また、自然に対する情緒が込められています。韓国の仏教寺院建築について調べたところ、韓国の仏教寺院の配置は中国で形成された仏教寺院の配置を受け入れましたが、時がたつにつれて韓国特有の寺院建築様式へと発展していったのだということがわかりました。仏教が韓国に入ってまもない初期建築の多くは、基本的に回廊が中庭のまわりを取り囲み、あるべき場所に建物があり、対称的かつ幾何学的な配置をしています。しかし、寺院はこのような配置様式を時が経つにつれて幾何学的な規範から抜け出し、韓国の自然条件と調和する自然な寺院の配置へと変わっていきました。日本の建築においても、西洋や中国のような左右対称の配置・建築様式がみられません。やはり、中国の模倣を脱しえなかった古い形態の建築にはみられますが、それを意識的に排除していったところに、自然に近づける意識、自然にはないものを拒絶するという美意識があらわれているといえるでしょう。

また、儒教的自然感も韓国の建築に大きな影響を与えました。儒教思想の代表的なものの一つに「天人合一思想」というものがあります。ここで「天」とは自然をも意味し、つまり人間と自然を一体化させる思想で、儒教思想においては自然とひとつになって融合させるような建築様式を生み出しました。このような建築物の多くは、渓谷があり、川が流れ、風月に近い場所に建てられ、自然の中にそのまま溶け込んでいるように見え、建築物の中からは自然が見渡せるようにできています。まさに、建築物と自然が一体となって建築空間を造り上げるのです。

韓国の伝統建築について調べてきて、日本と共通する部分、相違する部分などさまざまなことに気付いて大変おもしろかったです。韓国にしても、日本にしても、その土地の自然条件や土地信仰など、様々な要素と絡み合って建築が成り立っていることがわかりました。その中で、韓国の建築物を自分の目で見て、どこを素晴らしいと感じ、どこに驚きを覚えるのか。相手の文化を知るだけでなく、そんなところに、自分の日本人としてのアイデンティティを見出すこともでき、大変有意義なものになったと思っています。

5.2 韓国側

まず韓国と日本の建築物を比較するのが目的であるのに日本の建築物を見る機会がなかったのが残念でした。去年日本語科で行った調査で姫路城は見学できたのですが、日本の民家は見ることができなかったので日韓の比較は難しいと思いました。しかしこの実習を通じて韓国に住んでいながらも韓国の伝統生活文化をよく分かっていなかった私たちにとっては反省をするきっかけになりました。日本語を学ぶ立場で韓国の事に対して説明するのが当然の事であるし、また今後、外国に住んでいる人々に会って韓国を紹介する機会が来る可能性があるにもかかわらず、自国に対する関心がなかったし自負心と共に知識さえ

も浅かったので恥ずかしく感じました。それでも今回このセミナーに参加することで韓国の伝統的な家屋や民俗信仰などを見たり、体験をしたりしながら、韓国という国について、もう一度考えることができました。そして我が国の文化をもっと大切にしようという愛国心を持つようになりました。今後も我が国に対する関心を持って、次に紹介する時には自信と自負心を持って、外国人に誇らしく紹介することができるように努力すべきだと思いました。今度の機会で韓国の宮廷や民家を今までとは違った視点でしっかりと見ることができました。次にまたこんな機会があればもっと正確な調査をし、それをもとに深く討論したいです。

＜参考文献＞

浅草神社と浅草寺の説明
http://www7.ocn.ne.jp/~sehayama/oteratojinnja.htm#TOC1
韓国民俗村（日本語版）　http://www.koreanfolk.co.kr/folk/japanese/index.htm
宮内庁参観案内　http://sankan.kunaicho.go.jp/index.html
公園へ行こう！：小石川後楽園
http://www.tokyo-park.or.jp/park/format/outline030.html
護国寺　http://www.gokokuji.or.jp/
ソウル観光ガイド　http://www.hitour.co.kr/
ソウルナビ　http://www.seoulnavi.com/
庭園へ行こう。：小石川後楽園
http://teien.tokyo-park.or.jp/contents/access030.html
湯島天神　http://www.yushimatenjin.or.jp/pc/index.htm

研究報告

韓日両国の英語教育について

大須賀　践奈（お茶の水女子大学）
坂本　　美果（お茶の水女子大学）
佐久間　弘子（お茶の水女子大学）
池　　珂　娟（同徳女子大学）
趙　　恩　貞（同徳女子大学）
徐　　永（同徳女子大学）
崔　　守　志（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

「英語教育」という研究は日本側から提案してきたテーマであった。日本語を専攻している私たち韓国側には一見なんの関係もないテーマに見えるのだが、英語は韓国でとても重視されている外国語でもあるので、日本の英語教育について理解が浅く、まったく何も知らないと改めて気が付いた私たちは、韓国と比べて日本は、はたしてどういった英語教育を行っているのか知りたいと思った。それに加えて、現在、韓国政府から英語教育を中心とした教育に関する新しい方針や制度が次々と発表されているので、グローバル化時代と呼ばれるいまの時代に、韓国だけでなく、韓日両国はどのような形でその時代を迎えているのかを比較したいと思った。

「文化交流」といえばふつうは料理、衣服などを思い出す。でも、それだけが「文化」という枠組みに当てはまるとは言い切れない。外国語を取り入れる様相と、その教え方にも文化の差や、共通点はきっと存在するだろう。それゆえ、私たちはこのテーマが比較的ユニークなテーマだと感じた。いままでになかったような新鮮に思えるこのテーマに興味を持った私たちは、「英語教育」というテーマに賛同し、最終的に選択することとなった。その過程には、韓国の英語村という施設への興味も少しあった。

研究の目的は、両国の英語教育の比較である。具体的には英語教育の教授法と、英語教育の対象者、英語教育に力を入れている施設等の調査である。そこで、資料に基づきながら、短い期間ではあったものの、韓国と日本の英語教育についての理解をはかり、いろいろなことを考えることでお互いの文化に触れることができるよう努めることが私たちの目的であったといえる。

2. 事前調査

2.1 日本側

私たち日本側のグループは、それぞれグローバル文化学環、英語圏文化コースに所属し

ていたため、互いの興味を今回のセミナーになんとか結びつけ、個々人の長所や関心を最大限に活かすことのできようなテーマを設定したいと当初から考えていた。そこで、一つの共通点として出てきたのが「英語」である。韓国社会全体が英語教育に熱心であることは、日本でもよく知られている事実である。1997 年からは小学校で英語を必修科目として導入し、TOEIC の平均点も同じアジアの国でありながら日本よりも高いレベルにある。韓国の経済発展に必要なものの一つとして英語能力を位置づけ、政策等に反映させるなど政府の意欲的な対応も窺うことができ、現在の李明博大統領も英語教育に関する方針を明確に示している。私たちは先生方のアドバイスを受けながら、テーマを「英語教育」に設定し、韓国での実習を通じて、韓国では政府・民間でどのような取り組みがなされているのか、また日本の英語教育とどのように異なるのかを調べることにした。

韓国側と相談し、訪問先として「英語キャンプ」、「英語村」、「語学学校」そして「日本語学校」の四つが決定した。日本語学校は、「英語教育」とは異なるが、私たち日本人の母国語である日本語が第 2 言語としてどのように受け入れられているのかを知ることができる良い機会であり、韓国側の学生からの意見も聞くことができると同時に、「外国語教育」として何か共通点が発見できるのではないかと思い、最終的に見学先として取り入れることにした。日本では事前に、日韓の英語教育比較を行う資料として TOEIC に関する資料や民間の語学スクールのパンフレット、韓国での英語教育に関する資料等を集め、日本だけでなく韓国での英語教育に関する社会的な動向をある程度事前に把握することができるように努めた。また、韓国での実習時に語学学校へ行くことが決まっていたため、日本でも大手英会話スクールとして近頃TVCM等でよく目にするGABAで体験レッスンを受けてきた。

私たちが今回のセミナーで目的としていたことは、文化比較を通して両国の文化や価値観を理解することである。教育はその国の文化や人びとの考え方と密接に関連している。私たちは「英語教育」という、日韓で共通し、なおかつ日韓両国において互いに正負のイメージが付加されていないテーマを選ぶことで、より客観的にお互いの文化をとらえることができると考えた。

2.2 韓国側

事前調査をするためにまず、韓国の中で英語教育についてどのくらいにプログラムが運営されているのかを調べる必要があった。韓国ではたくさんの英語教育が行われていた。小さい頃から年齢には関係なく、みんな英語を勉強していた。TOEIC, TOFLE, TEPS, 会話など、その種類もさまざまだ。韓国においてどんな風に英語を勉強しているのかを実際に見ることができる場所を探すのが事前調査の一番大きな目標だった。調査しながら分かった一つの事実は韓国では TOEIC の比重が高いが、日本では低い傾向にあるということであった。まず、英語教育に関する色々な機関やプログラムを調べて、そのなかから四つの項目に絞った。それが英語キャンプ、英語強化小学校、英語塾、そして英語村であった。

私たちは事前調査よりも見学ができる機関の承諾をもらうことの方を優先しなければならなかった。誰も自分の授業をただの学生たちが見学するのは、あんまり愉快に思うわけがなかった。

英語キャンプは普通、大学や塾でやっていると思ったので、インターネットから夏の英語キャンプを実施する機関の名前と電話番号を全部見つけた。実は区と合同で運営する場合が大部分であるが、 最近は区役所で独自に運営している場合もあるようだった。多くの区役所に電話をかけたが、許可をもらうのはとても難しいことだった。何度かの失敗の末、ようやくソウルの漢西区役所から許可をもらった。漢西区で運営している英語キャンプはインターネットで見た情報によって、訪問の日と時間を決めて、許可証の申請を行った。その後、英語キャンプの場所まで行く道を調査し、その場所の雰囲気をわかるために直接行ってみた。以下が漢西区の英語キャンプの事前調査としてインターネットで手に入れた情報である。

*漢西夏休み英語キャンプ.

・ 教育向け ： 漢西区 小学生 3 ～6 年生 60 名
・ 教育期間 ： 08. 7. 28(月) ～ 8. 19(火) 午後 1 ～ 5 時 (4 クラス/14 日)
(月～金曜日 授業/ ただし, 7 月 31 日, 8 月 1 日 は休み)
・ 教育場所 ： ヨンチャンドン 所在 漢西女性文化施設
・ 受付日 ： 08. 7. 7(月) 午前 9 時 ～ 7. 11(金) 午後 6 時まで
・ 内容 ： 聞き取り·書き 評価の後 4 クラス 編成

英語の特別授業をする学校は全てセミナーをする頃には、やらないと言われて他の計画を模索しなければならない状態に陥ったことがあった。その時、大学の言語研究院で運営するプログラムを探したらどうかと、先生が言ってくれた。

言われたとおりに、近所の大学の言語研究院を探した結果、３つくらいの候補に電話をかけた。大学の言語研究院では英語キャンプや大学生向けの英語プログラムを行っていた。大学生向けの英語プログラムはその研究院との日程が合わず、他の研究院の英語キャンプに交渉をした。その研究院は他のところとは違って、交渉がなかなか難しかったので、先生の助けまで借りながら何度も電話をし、許可をもらった。

塾は元々、英語教育を行っている英語教室の授業に参加したかった。ところが、この教室で 7 人ほどの人が突然、同じ授業を受けることはできなかった。この教室にも諸事情があったのだ。そして、韓国の大部分の英語の授業では、英語だけでなく韓国語で授業をしているので、日本の学生が韓国語をよく理解できるだろうかと思って、英語の授業よりは日本語の授業の方がいいだろうと思った。日本の学生たちが韓国へ来る前に、お互いに意見交換をして英語の授業の代わりに日本語の授業に参加することに決めた。こうして私たちは日本語の授業を受けることになった。それから、韓国の金先生から、日本と韓国の英語教育や日本語教育を行っているスクールを下調べして、比較するのもいいかもしれない

と言われ、お互いに連絡して、日本側は日本の英語スクールを、韓国側は韓国のスクールを調べた。その結果はセミナーの発表の場で利用した。

そして英語村は最初から決めていた。はじめに日本側の学生のテーマを聞いたとき、英語村を一番初めに思い出したので、日本の学生たちに英語村について話した。日本側からも、先生から英語村の話を聞いたことがあると言われて、英語村に行くことになった。日本側が韓国へ来る前に、韓国側は英語村の下調べを行った。英語村は２年前にできた教育機関で、園児から高校生までの英語教育のためにできた場所である。英語村には外国人と韓国人の先生がいて、英語キャンプのプログラムを行っている。そのほかに、学生たちが何か作ったりして、楽しく英語を学ぶことができるようにしていた。英語村の中にはいろいろな建物があって、見学もできた。ただ、英語村には大人のための特別なプログラムはなかったので、残念だった。

ボール遊びをしながらの英語学習

日常生活を想定した、
英語学習で用いられる模型の一つ

ビデオを用いた英語学習

3. 韓国での野外実習

＜実習１日目：英語キャンプ＞

初日は英語キャンプを訪れた。英語キャンプとは主に小学生を対象にした英語の学校である。ここでは夏休みや冬休みを使い、集中的な英語教育が行われている。クラスは遊び、文法、リスニングの３つに分けられている。「実生活における英語」の使用を意識したプログラム構成になっており、視聴覚設備等を用いた授業をはじめ、スクール内にはパンをつくることのできる場所や、軽い運動ができる場所などが確保されていた。たとえば、遊びのクラスでは 10 人程の子供達がネイティブの教師一人とボール遊びやままごとをする。そこでは日常生活でしばしば起こりうるシチュエーションを実際に作り、食べ物などの模型を使って、英語を学習することで日常生活で使える英語が身につく。こうした模型を用いることで、英語学習の内容に相当の幅を設けることができるだろうということが容易に推測された。文法のクラスでは韓国人の教師が終始英語でレッスンを行う。子供同士は韓国で喋っているものの、教師が英語で話すことの内容を十分に理解し、教師に対する返答や冗談すらも英語で行っていた。リスニングのクラ

スでは子どもたちに映画を見せ、ある場面で何が起こっていたのかを生徒に具体的に説明させる。これにより、感情や位置関係など抽象的な内容の描写の仕方を楽しみながら覚えることができる。3 つのクラスで共通していたのが、教師がシールを使って授業を行っているということである。これは授業内で子どもたちの自発的な発表を促すために行われており、子どもたちが教師が投げかける質問に対し発表したり、正解したりするごとにシールを与え、そのシールを子どもたちは教室内に掲示された表に貼っていく…というこの学校独自の工夫である。子どもたちが授業後、こぞってシールを表に貼りに行く姿は、韓国における激しい競争の一端を感じさせた。

授業後、教室内に掲示された表に
シールを貼りにいく子どもたち

＜実習２日目：徳成女子大学英語学校／英語村＞

２日目は徳成女子大学英語学校と英語村を訪れた。徳成女子大学英語学校は政府の補助金で大学が運営している英語の専門学校であり、学生たちは一般的な受講料よりも安い値段で英語を学習することが出来る。この補助金は低所得者家庭の子どもが優先的に受けることができるため、成績に関係なく誰もが学習の機会を与えられているといえる。クラスは 10 クラスで、1 クラスに大体 10 人の生徒、それに加えて英語を母語とする教師と韓国人の教師がつく。生徒と教師は常に英語を用いて会話する。ここでは授業に支障がないようにということで、１教室に１人ずつ分かれて授業の様子を見ることになった。そのため、授業のレベルも対象とされる年齢も全く異なる授業をそれぞれ見学し、それぞれに長所・短所を見つけてきた。

英語村(English village)は京畿（Gyeonggi）道坡州（Paju）市にある 2006 年に国からの補助金で開設されたテーマパーク型子ども向け教育施設である。目的として３E、Experience（経験）、Entertainment（楽しみ）、 Education（教育）を掲げており、Edutain（Education 教育＋Entertainment 娯楽）を、子どもに経験してもらうことをこの施設のコンセプトとしている。子どもたちを中心に、多い日には 5000 人、年間 50 万人が「楽しい英語の実践」ためにやってくるそうである。施設内では英語が使用され、韓国にいながら海外に来たような気にさせる建物や飲食店が並んでいる。宿泊施設も設けてあり、夏休みの間、村の中で過ごすことも可能である。遠足先としても使われているようで私たちが施設

を訪れた日は、小学生たちのグループをたくさん見かけた。小学生が本当に英語を使って施設内で過ごすのだろうかと疑問に思っていたが、実際に目の前で英語を用いて会話をしている子どもたちを目にし、この施設の有効性を感じた。ここでは、幼稚園児や小学生が主な対象だが、様々な年齢層の人のためのクラスが設けられている。私たちはキッズ・プログラムを見てきた。部屋には遊び場や本等があり、子供たちは教師たち助けを得ながらスクリーンに出てくる絵や動きを英語で説明していた。

＜実習 3 日目：日本語学校＞

3 日目は日本語学校だ。私たちが参加したクラスの生徒は主に大学生で、私たちのグループの韓国人学生の中にも受講した経験を持つ学生がいた。教師は日本に滞在したことのある韓国人の方で授業は日本語だけで行われていた。先生の話によれば、今韓国人が必要としている語学力は「使える語学」だそうだ。つまり日常生活で使える語学力である。先生は「聞き取り」→「会話」→「文法」が語学の学ぶ上で大切な順番だとする。実際に生徒たちは先生の日本語を聞き取り、それに対して意見を日本語で言い合う。授業で使用される読み物も先生はあえて新聞やインターネットで掲載されている人生相談などのトピックを選んでくる。それらに使われている日本語は「今、実際に日本で使われている日本語」であり、日本の文化や現在の日本社会を学びながら今のいきいきとした日本語が身につけられる。先生は試験の為にひたすら文法を覚える学習法では語学の能力は伸びないという。自然に覚えることに価値があるとする先生の語学学習に対する考え方に、日本人としても非常に共感を覚えるとともに、日本語／英語に関係なく共通する姿勢であると思った。

4. 調査結果

自習を通じて、事前に聞いていたとおり、やはり韓国社会における英語の重要性が高いことを実感した。松本氏によると[i]、韓国で大学生を対象に行われた調査において、95%の人が英語の重要性を認識し、「英語実力者」に対して「能力がある者」としてのイメージを抱いているという。英語の能力に対するこうした社会的な動向に伴い、企業でも新卒採用の際には仕事で英語を利用するかどうかに関わらず、英語能力を重要な評価基準として位置づけているということが韓国側の学生からも知ることができた。

英語の重要性が高まり、様々な取り組みがなされているという点は日韓でも共通する事項であるが、なかでも日本側が大きく注目したのは、英語村をはじめとする政府や自治体の英語教育支援である。

そもそも、どうして「英語村」という施設が生まれるに至ったのだろうか。国民の英語能力を高めるために、政府がここまで巨額の予算を費やしたことに興味を持ち、詳しく調べてみたいと私たちは考えた。そこで「英語村」をキーワードにインターネットを中心に調査を進めたところ、韓国における英語教育の一つの特徴が見えてきた。それは、英語教育のために莫大な学習費がかけられているということである。韓国国民の年間の英語私教

育費は 15 兆ウォン（日本円にして約 1 兆 9000 億円）に達するとされ、1 人当たりの教育費は日本の 7.8 倍とされる[ii]。これが国内ビジネスの範囲内での話なら問題はないが、韓国銀行の発表によれば今年 1 月から 5 月末までに、留学や研修のための送金目的で海外に送られた資金は 8 億 9000 万ドルにのぼるとされる（前年の同期間と比較して 30%強の増加）[iii]。小学生 でも 3 週間ぐらい海外へ語学研修に行くとなると、300 万ウォンから 400 万ウォンの費用がかかる。経済的な発展を目指す韓国政府としては、国外へ流出する英語教育費を下げることで、国内経済の活性化をはかるという思案もあったのではないだろうか。ともかく、これほどの多くの教育費を負担している韓国国民にとって政府や自治体が国内で比較的安い英語教育を受ける機会を設けてくれることは歓迎すべきことであるにちがいない。日本側は、英語村において入場料とは別に各プログラムごとに料金を払うのでは、英語の教育機会が平等であるとはいえないのではないかと考えていたが、留学の代替施設として英語村を位置づけた場合、海外へ行くよりもはるかに安く（1 週間 8 万ウォン、4 週間 60～80 万ウォン）、留学と同様の期間、英語の学習ができるという点では非常に意義のある教育施設であると思った。ただし、実際に留学と同様の効果が得られるかというと、日韓両学生にとっても疑問の余地があった。特にキッズ･プログラムでそうした疑問を感じた。個々人のレベルに適したプログラムであるかということや、英語能力が比較的低い子どもが自分よりも能力の優れた子どもと同じプログラムに参加することで発言の機会が抑えられてしまわないかということ、また、子どもだけを対象にしているために、中・高・大学生や一緒に施設に来ている親たちがこの施設を活用することが難しいということが問題ではないかと思った。韓国国内でも、英語村は地方自治体が運営するものであるため、特定地域の子どもたちに対象が限られるのではないか、また、施設につぎ込んだ費用に見合う効果が得られるのかなど、英語村に対する懸念は少なからずあるようである。

もう一つ日本側にとって印象的であり、文化的な差を感じたのは、韓国の人々の英語学習に対する積極性である。社会で英語の能力が必要とされているとはいえ、小中学生の頃から、こんなに自発的に英語を話すものなのかと驚いた。韓国へ行くまでは「学力競争が激しい」というイメージから、英語はあくまで学習教科の一つとしてとだけとらえられているのかと思っていた。そのため、スピーキング面においてこれほど熱心に学習が進められているということは意外だった。上記でも触れた松本氏によると、“社会的成功”のために英語が重要だとする生徒のうち、重要だとする理由として 1 番多いのが、「意思疎通を図る・世界化に対応する」が 42%、「基本的能力として必要である」が 22%、私たち日本人が多いであろうと予測していた「就職のため」は 12%、「大学進学のため」が 2%ということだった（ただしここでの調査対象は中高生であるため、就職が現実的な問題として間近にある大学生とは多少、調査結果が異なると見られるとしてある）。韓国での実習を通じ、「日常生活で使える英語」に焦点を当てたプログラムが多かったことは、コミュニケーション手段としての英語が韓国国内で広く意識されていることを反映していたのではないだろうか。いずれにしろ、子どもたちは私たち日本人に英語で話しかけるなど、実生活の中

で英語を生かす能力を身につけていることは事実である。

鳥飼氏は、日本人の英語運用能力について、文化的な背景も影響しているとする考えを示している[iv]。韓国側の話を聞いたり、実際に韓国での滞在を通じて感じたのは、こんなに近い国であるのに、韓国人のほうが日本人よりも自分から話しかけたり、自分の主張を明確に伝えたり、人とより関わろうとすることが多いということだ。語学学習において積極性が重要であることは間違いない。島国として長い歴史を過ごしてきた日本ではいまだに英語が日常生活で必要か、という声をたまに聞く。一方韓国ではグローバル化時代における経済発展を視野に入れ、社会全体で英語能力の必要性を認識し、将来必要になるものとして幼い頃から学習が進められる。それに加えて、持ち前の積極性がある。当初、私たち日本側は韓国における政策や教育内容に何か特別な工夫や秘訣があるのではないかと思っていた。しかし、いくつか特徴的な施策はあっても、そこまで日韓で大きな差は見られなかったように思う。このことは、日本の文化的な背景を考慮した英語教育が実践されれば、日本で問題とされる英語の運用能力も克服できるかもしれないという可能性としてとらえたいと思った。また、日本側は英語の早期教育に対し、固有の文化的価値観が衰退する等の理由から批判的な考え方をしていたが、伝統料理をはじめとして固有の文化を維持し、独自の文化を築き続けている韓国社会を見て、必ずしも懸念されることばかりではないかもしれないと考えるようになった。

5. 考察

5.1 日本側

今回韓国の英語教育を実際に体験したことで様々な新しいことを学んだと思う。第一に言えるのが韓国政府の熱心な取り組みに圧倒されたということだ。よく「国をあげた取り組み」といったことばを耳にするが、日本で暮らしている中で、国をあげた取り組みを身近に感じることは稀である。日本ではただ提案がなされるだけでそれが実行されるのには時間がかかる。実際に英語教育もかなり前から日本人の英語運用能力の低さが指摘されていながら、そうした問題を解決するための施策がいまだに政府によって実行されていないのが現状である。反対に韓国政府はリーダーシップをとって、国の発展に力を入れているように思う。そもそも日本では小学生が安い値段で容易に英語を学習できる環境自体が少ない。また、民間の語学学校においては利益の利用の仕方に日韓で差が感じられた。日本では企業は店舗を増やすことに利益を使うことが多い。大手企業の売りは、駅前など身近なところに同系列のスクールがあるということである。一方韓国ではその利益は学校の教育設備の向上にあてる。例えば食べ物の模型だとか、パンを作れる設備だとか学校数を増やさなくとも、１つの学校の環境を良くすることで学習内容を充実させる。

次に特徴的であったのが、学習法が非常によく練られているということだ。今回訪問してきた４つの場所に共通して言えるのが「自然に身につく語学」と言うことだ。遊んだり、映画を見たりすることで楽しみながら語学が学べるのは、勉強させられているという感覚

なしに、興味や関心を高めながら学習をすすめることが出来るのだろう。日本では試験や受験のために文法を学ばされる。そして、問題に出てくる英語は日常会話ではあまり使用されない英語だったりする。会話能力も伸びず結局「使えない」英語を学習しているだけなのかもしれない。

次に韓国と日本の最大の違いだと思われる「積極性」だ。私たちは今回の英語教育を調べることで韓国の熱心な取り組みは韓国人の積極性からくるものではないかと大いに感じた。色々な授業に参加してきたが、生徒達は休み時間になると私たちに話しかけてくることが度々あった。最初は韓国語で話しかけてくるが、日本人だと分かると英語で話しかけてきたり、日本語が分かる者は日本語で話しかけてくる。授業中も皆熱心に発言して教師との会話を楽しんでいるようだった。日本では反対に発言をすることには努力が伴う。体裁を気にするため間違えたら恥ずかしい等の理由から、教師が幾ら発言を促しても生徒達は無言でいることが幾度もある。日本の場合積極的なのは生徒達ではなく生徒達の親なのだ。塾に行かせたり語学学校に行かせたりするのは韓国の親と同じだ。しかし日本では政府は私教育よりも公教育をより重視するため、私教育費に対する支援が少ない。その点韓国では、政府が多くの学生の語学学習を促し誰もが語学を学べる環境を作りだす努力を進めている。

日本では英語の早期教育に対して「日本語が乱れる」など言われたりするが、問題の核心がずれて議論されているのではないかとこの実習を通して感じた。日本語が乱れる程工夫された教育法もない現状でそのようなことは言えない。韓国では 1997 年から小学校で英語の授業が導入されているが、それで韓国語が乱れたという問題は生じていない。寧ろ国民の平均的な英語能力もあがり国際化をしっかり意識している姿勢は素晴らしいとしか言えない。教育に対する国をあげた政策や国際化に対する強い意識が日本でも定着していくべきである。

5.2 韓国側

今回のセミナーはただ韓、日両国の文化交流だけでなく、より深い主題を扱うことからお互いの価値観や考え方を知る機会になった。

私たちの組は「日本と韓国との英語教育での違い」を主題に、実習活動をしながら日本の英語教育と韓国の英語教育との違いは日本人、韓国人の特性と少なからず関係があることを知った。

同じ組みの日本の友だちは、「日本では誰かが授業中に発表するとか意見を言うと儒教の流れを切ることになるし、これは結局他の人に迷惑をかけることになると思う」と言った。それで、韓国側はこんな日本人の特性が授業の雰囲気、ひいては授業の方式にまで影を落としていると思った。以前触れたように、「英語教育」という、文化とは全然関係なさそうに見えることからも日本人の考え方や特性を見つけることができた。

また、今回のセミナーはそれまで全く面識のなかった人たちが、1 泊 2 日の旅行を通じ

て、同じグループの友達同士が仲良くなる機会となり、良かった。普段から持っていた「日本人は仲良くなりにくい」といった先入観を払拭することになった。

特に、うちの組の日本の友だちはグローバル文化学と英語教育を専攻していたので、人間関係においては他の日本人よりも開放的に感じられた。

一方、日本の友だちと一緒に活動しながら彼らに迷惑をかけないようにする習慣が身についているのが明らかになったし、実感された。このような彼らの文化にはすっかり慣れたものの、韓国より少し礼儀正しくて時々対応しにくいと思った。韓国の友だち同士は礼をわきまえるよりは楽に接するのが普通のことであるからだ。

このような文化的な違いにも関わらず、彼氏や初恋などの話をしながら日本の友だちも我々と同じく「愛に心をどきどきさせる女子大生」という同質感を感じた。

近いながらも、遠いと呼ばれる日本、そして日本人。

このセミナーをきっかけとして彼らをもっと違う視点で見、考えることができたと思う。

---

[i] Benesse 教育開発センター　若手研究者現地調査レポート
韓国社会における英語熱と学校教育　松本麻人

[ii] 東亜日報ホームページ(２００６年１１月１７日付)
http://www.donga.com/fbin/output?strm=2&n=200611170096

[iii] KBS　WORLD　Radio
http://world.kbs.co.kr/japanese/town/town_trend_detail.htm?No=63

[iv] 朝日新聞　多言語・多文化進む日本社会(2008 年 5 月 26 日付)より一部抜粋
…『英語は大事だ』ってみなさん言いますが、日本には『ぺらぺらしゃべるのは軽薄』『おしゃべりだと見られたくない』というかちかんがあるでしょう？家庭でも学校でも『静かにしなさい』『先生の言うことはちゃんと聞きなさい』としつけられる。そういう価値観の中にいる日本人の子供たちが、英語の授業のときだけ『積極的にコミュニケーションをとりなさい』とか『しゃべりなさい』とか言われても、実際はなかなか難しい。私は日本人が英語下手なのは、日本人の言語観や文化からきているものだと考えています。…
(立教大教授(言語コミュニケーション論)　鳥飼　玖美子さん)

研究報告

日本と韓国の食文化比較

伊藤　真和吏（お茶の水女子大学）
角田　　巴奈（お茶の水女子大学）
脇川　　友恵（お茶の水女子大学）
渡邉　さやか（お茶の水女子大学）
イ　　ミ　ヒ（同徳女子大学）
イ　　ユ　ニ（同徳女子大学）
イ　ウンソン（同徳女子大学）
ボン　ジョン（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

食文化は私たちの生活に最も身近な文化であり、それぞれの文化の特徴が表れやすいものである。日本と韓国は隣同士の国であり多くの共通点をもつ一方で、海と大陸という地域的な事情を持って、お互いに違う固有の特性を持つから差異もある。それぞれの国で独自の食文化を築いてきた。現在韓国の代表的な食べ物とされているキムチやビビンパなどは日本と異なる食文化の良い例であるが、日本の海苔巻き（巻き寿司）と韓国のキムパプは、ご飯を海苔で巻くという点で非常に似ている。このように違うようで同じ、同じようで違う日韓の食文化を韓国の学生とともに体験し、比較しようと思う。そして、両者の特徴や背景を比較し、理解することでそれぞれの国への理解を深めることを最終的な目標としたいと思う。

2. 事前調査

2.1 日本側

日本の海苔巻きは太さによって細巻き、中巻き、太巻きの 3 種類があり、それぞれ酢飯と具を海苔 1/2 枚、1 枚、1 枚半で巻いたもの。一般的には細巻きと太巻きが食べられている。日本のお餅は稲作が東南アジアから伝来したと同時に伝わったといわれ、豊かな国を作る食べ物とされていたらしい。多くの餅料理は地域の特産物を利用していたため、現在でも各地で作り方や具は異なっている。お雑煮も地域差が大きい。江戸時代以降庶民にもお餅が浸透し、食べ方の種類も増えた。日本の懐石料理については、もともとは茶会の際に主催者である亭主が来客をもてなす料理を指す。「酒を飲みながら楽しむ」会席料理とは異なり、「茶を楽しむため」の料理である。懐石料理は一汁三菜が基本で、食べ方にも様々な作法が存在する。

日本の外食の始まりは浅草の茶飯屋といわれ、明治時代以降洋風牛鍋屋やビヤホールも

でき、庶民にとって身近なものとなった。戦時中は外食自体規制され、戦後しばらくの間外食はよそ行きの行事とされていたが、ファーストフード店やファミリーレストランのチェーン店化に伴い再び一般にも浸透した。

2.2 韓国側

韓国のメンバーからも韓国のお餅、のり巻き、そして宮廷料理について調べてもらった。日本のお餅と違い、韓国のお餅は餅米よりうるち米を使って餅をつくること、蒸すものが多いこと、地域によって餅の形態が異なることを学んだ。韓国ではのり巻きは遠足のときに持っていくほどメジャーなもので、中身もニンジン、きゅうり、ハム、ホウレンソウ、ゴボウ、たくあん、たまご、ツナ缶などバラエティに富んでいることを知った。コンビニでよく売られていたり、のり巻きの店のチェーン店もあったりするとのことで日本におけるのり巻きの存在との違いを感じた。宮廷料理は王家の食べ物とのことだったが、庶民の食べ物との違いは単に塩辛くないか塩辛いかの違いのようだった。また食べ物の作り方と食べ物を陳設する法までも制度化されていたことを学んだ。宴の際に喜んでお祝いをするということは後々庶民にまで伝わり、現在の韓国の人々の食事にも影響を与えているとのことだ。

3. 韓国での野外実習

●８月６日

・お餅博物館（仁寺洞）

韓国の伝統的な食べ物と餅の歴史について展示した博物館に行った。色鮮やかな餅料理が並べられ、伝統的な行事と共に、どのようなときにどのような餅を食べるのかが紹介されていた。

・お餅カフェ（仁寺洞）

お餅博物館と同じ建物の中にあるお餅カフェでは、さまざまなお餅を使ったお菓子を食べることが出来た。たくさんの種類の餅を観察し、食べ比べをした。

●８月７日

・お餅作り体験

韓国風の餅を使ったお菓子をつくる体験をした。講師（菓子職人）の指導のもと、米や餅米を挽くところから包装するところまで全部自分たちの手でお菓子をつくってみた。講師の説明を聞き、実際に自分たちでつくってみることによって、韓国の餅文化に直に触れることが出来た。

●８月８日

・日本の餅、海苔巻き、韓国のキムパプ試食会（メンバーの家）

日本人グループが日本から持ってきた材料で日本の餅を再現し、その前の実習で触れた韓国の餅と比較しながら試食会をした。日本の餅として日本人が持ってきた餅は、四角餅、白玉、だんごの３種類である。味付けも醤油、きなこ、あずきなど日本から持ってきたもので出来る限り日本の味を再現するようにした。また、日本の海苔巻きと韓国のキムパプを作って、食べ比べをした。前日と同様、材料から作る過程を見て体験することで、それぞれの共通点や相違点を発見することが出来た。

4. 調査結果

●８月６日

お餅博物館では、韓国の餅の文化について学んだ。餅の昔ながらの作り方、伝統的な行事で作る餅、その行事の様子、その時の餅のもりつけ方、餅に混ぜる副材料の木の実の種類を学んだ。また、日本の餅の原料が餅米であるのに対し、韓国はうるち米が主な原料であった。加えて、日本より多くの副材料を用い、木の実などお餅博物館に飾ってあるものだけでも２０種類以上はあった。調理方法も様々であり蒸す、つく、焼くといった方法があることを学んだ。一通り博物館を見学した後は「トック（お餅）カフェ」に行き、各々ミニサイズの餅を選んで比較しあった。

●８月７日

お餅作り体験で作ったのは２種類で、どちらも韓国で広く知られているものである。日本で食べられているお餅の多くは炊いた餅米をついて作るが、今回作ったものはそれぞれうるち米、うるち米と餅米を混合したものを使用しており、調理法も材料を全て混ぜた後に蒸し器で蒸すというかなり異なるものだった。食感の一つはお餅のケーキでふわふわした食感で、もう一つは日本のヨモギ餅に似たもちもちとした食感だった。また、棗（なつめ）や松の実など、日本では食材というより「漢方薬」に分類されてしまいそうな木の実がふんだんに使われており、調理法、材料の面でも両国の違いを感じた。

●８月８日

ボン・ジョンさん宅で海苔巻きを日韓それぞれで作り、私たち日本側はさらに日本のお餅・団子・白玉・高野豆腐を作った。海苔巻きに使う材料は、キュウリと卵以外は全て日本から持参した。写真は、左と中がキムパプ、右は日本の海苔巻きである。日本の海苔巻きの中身の具は、キュウリ、厚焼き玉子、かんぴょう、さくらでんぶであるのに対し、韓国の海苔巻き「キムパプ」の中身の具は、たくあん、にんじん、ツナマヨネーズ、薄焼き玉子、青菜野菜、ジャーキーのようなもので、米も酢を入れていない。

海苔巻きとキムパプの共通点は、形は上の写真のようにそっくりで、具も双方に玉子が入っている。しかし、キムパプの玉子は薄焼きで海苔巻きは厚焼きなのである。更に、縦長のものを「巻く」ということで、海苔巻きもキムパプも具材は全て縦長に切られている。

しかし、玉子以外のキムパプの具は、たくさん・ツナマヨネーズ・にんじんなど、個々の具は日本でも食べられているもので、韓国だけの特別の具材といったものはなかったが、キムパプは日本の海苔巻きに比べると、巻き寿司というカテゴリーではなく、お好み巻きといった感じがした。日本でも、ツナマヨネーズ入りのおにぎりは人気だが、海苔巻きは

おにぎりと違って、ツナマヨネーズなどの流行の具材を取り入れておらず、海苔巻きの具は、未だに昔ながらの具が主流なのである。それに比べて、キムパプは中身の具は、それぞれが強い味を持っているために、「おかず」を食べているような気がした。

前日、韓国の餅を味わうことが出来たので、今回は日本から持参した団子粉と白玉粉をこねて茹で、既製の切り餅をフライパンで焼き、日本の餅と団子、白玉はどういったものなのか、韓国の餅と、どう違うのかを皆で比較した。また、日本の食べ物を紹介するために、参考までに持参した高野豆腐は日本のダシで煮込み、団子と白玉にかける「みたらし」も持参した日本の醤油と片栗粉で仕上げた。あんこときな粉もそれぞれ持参したものである。

5. 考察

5.1 日本側

●８月６日

日本と餅の作り方や道具は杵や臼を用いる点、その道具が木や石でできている点など比較的似ていた。大切な行事の際に餅を食べることも似ていると感じた。印象的だったのは、地域や行事によって非常に多くの餅のバリエーションがあることだ。異なる点は日本と比べ色彩が非常に豊かなこと（ピンクや黄、緑など華やかな色が多い）と餅の重ね方が特徴的だったことである。韓国の学生に尋ねたところ、高く積み上げられた餅のうち、半分くらいは本物だが半分くらいは作りものだということだった。

お餅カフェではミニサイズの餅を選んで食べたのだが、博物館で見た餅とは趣が異なり、お洒落な感覚で餅を食べるという、西洋の文化も取り入れた、現代の韓国の餅の文化を感じた。

●８月７日

今回の調理体験で作った餅はどちらも餡や蜜を用いた甘いものであったが、韓国ではどちらも主食の一環として食べられているという。韓国においては、米を原料としている餅は、米と同様に主食として食べるものであるとされているからである。つまり、食事と間

食の差は材料にあると考えられる。一方で、日本では餅に限らず甘い食べ物が食卓に上ることはまずなく、おやつやデザートとして食後に食べられている。例えば、食事にもデザートにも使用される食材（さつまいも、かぼちゃなど）の場合、「おかず」と「お菓子」では調理法も味も異なっている。このことから、日本においては味や調理法が食事と間食を分けていると考えられる。米を主食としている点では日本と韓国は共通性があるといえるが、料理としての餅の捉え方には大きな差異があることがわかった。

●８月８日

海苔巻きとキムパプの比較を通して、改めて日本の海苔巻きについて考えることが出来た。私たちは、事前学習の時から見た目も似ている韓国のキムパプと日本の海苔巻きを比較することで、日韓の近さと遠さについて、食文化を通して感じることができるのではと、期待していた。実際に食べて比較し、思ったことは、日韓では味付けや具材の選び方などが異なり、キムパプと海苔巻きは形だけが似ているということだ。形だけといっても、具の並べ方つまり巻いたものを切ったときに出来る断面を考えて、黄・緑・赤・茶など色合いが良いものになるように、考慮されて作られているという共通点が感じられた。韓国には、キムパプ専門店があることや、屋台でもキムパプが売られていることから、日本の海苔巻きと比べると、キムパプはいつでも食べたい時に食べるものという風に感じた。もちろん、日本でも海苔巻きは食べようと思えばいつでも食べられるものであるが、恵方巻や何かのお祝い事など、どちらかというと特別なときに食べるものという感覚である。味が違うだけではなく、どんなときに好んで食べられるのかも異なるということがわかった。

5.2 韓国側

日本の友達と韓国の食べ物を体験して、また日本の食べ物を作って見る過程で悟ったことは両国の料理はどちらも色彩感や季節感を重視するということだ。特に餅の博物館で見た韓国の餅の見かけは日本の餅と特に差はなかった。これは四季が明らかな韓国と日本の美意識を現わしたりする。また両国の餅を作って見て、試食して、お互いに話をして見た結果、日本の方がもっと主食と主食ではないことの区分けが確かだということが分かった。例えば韓国では餅はご飯のかわりになるほか、お菓子のようにみたいなものになるが、日本は餅をご飯のかわりにすることがないと言う。また日本の食べ物は韓国の食べ物より少ない量の調味料のみを使うというの、そして私たちグループのメインの主題ではなかったが、現在日本で焼肉等の食べ物が人気があることは、さしみ等の発達とは相対的に，日本の地域的特性を反映した発達されなかった肉食文化を反映すると見られる。

最初、「韓・日の食文化の比較」を主題に決めたときは、「米を主食にする二つの国にそんなに大きい差があるのか」と疑問を抱いた。主題を「お持ち、海苔巻き」というもので決めた後にもそのような疑問はどんどん大きくなった。しかし、直接にお餅と海苔巻きを、作ってみてから感じて、韓・日の食文化は、考えたことより違うところがたくさんあった。

もちろん、韓・日は、食べ物のかたちが似ているし、主食でこめを食べることなど、共通点がある。

たとえば、韓国の伝統的な食べ物の中では蒸した大豆を発酵させたものをなべで食べている食べ物があるが、実習の日にそれを食べた日本側の学生の方が日本にも味が同じようなもろみ味噌と言うのがあると言ってびっくりした。そんなのは韓国だけの固有な味だと考えていたからだった。

でも、やはり違うところもたくさんあった。

まず、お餅を作った日に感じたことであるが、韓国では、なつめとキキョウをよく食べているが、日本ではよく食べないものだと聞いて、珍しいと考えた。

韓国では、お餅を主食のご飯の代わりに食べるが、日本ではただのお菓子で食べるというところが違った。それで日本のものは韓国のものより、甘い味があった。

海苔巻きの場合には韓国のは日本より味が濃かった。その理由を考えてみた。

韓国の海苔巻きはベースの米とごま油を混ぜてちょっと油っぽいのだが、日本の「海苔巻き」は米に食酢を混ぜてあっさりした味だった。

いろんな食文化の経験を通して本当に韓国と日本は「近いけど別々の国」というのを感じられる時間だった、と思っている。

＜参考文献＞

笠原 秀(2004)『おもちの大研究―日本人とおもちのおいしい関係』PHP 研究所
奥村彪夫、中川学(2006)『わくわくお正月とおもち』農村漁村文化協会
次山信男 (2002)『発見！体験！日本の食事（６）もち　人々の行事を知ろう』ポプラ社
お雑煮をめぐる物語
http://www.konishi.co.jp/html/fujiyama/zouni/index.html
「外食」の歴史（国立国会図書館第 145 回常設展示）
http://www.ndl.go.jp/jp/gallery/permanent/pdf/145.pdf
フリー百科事典ウィキペディア
http://ja.wikipedia.org

研究報告

韓国の軍隊
ーアジアの平和を願って私たちが考えたことー

田平　祥子（お茶の水女子大学）
斎藤　智美（お茶の水女子大学）
末永　沙織（お茶の水女子大学）
豊永　優美（お茶の水女子大学）
곽　무　진(Kwak Moo-Jin)　（同徳女子大学）
김　예　솔(Kim Ye-Sol)　（同徳女子大学）
김　지　은(Kim Ji-Eun)　（同徳女子大学）
박　수　지(Park Su-Ji)　（同徳女子大学）
박　자　연(Park Ja-Yeon)　（同徳女子大学）

1. 研究の動機と目的

アジアに平和は訪れるだろうか？私たちは、アジア人としてアジアに平和をもたらすことができるだろうか？アジアから軍隊がなくなる日はくるだろうか？

韓国と日本は、歴史を通じてアジアで交流してきた。しかし、日本は帝国主義の高まりのなかで、韓国を併合し植民地化した。外勢による朝鮮半島の分断と、その結果としての韓国の徴兵制は帝国主義の産物であり、日本人である私たちに無関係ではない。韓国人は、徴兵制に代表される軍事文化にさまざま影響を受け、生きている。一方で日本も自衛隊という戦力を持つ。日本では、自衛隊はあくまで防衛のための組織という形を取る。しかし、休戦状態という背景を持つ韓国の軍隊は多少なりとも異なっているだろう。私たちは韓国実習で、軍事文化が韓国社会に与えている影響、特に若者に与えている影響を、他人事ではなく「アジア人」としてとらえ、考察したいと考えている。そして、最初に挙げた問いについて、話し合い、平和のために私たちができることはなにか、ということを考えたい。

上述したものが当初の目的であった。私たち日本人にとって軍隊は、平和を壊すものというイメージが強く、軍隊と平和は相反するものだと考えていた。しかし、実習を進めていくうちに、韓国人の本音にふれたディスカッションや、朝鮮半島分断という事実を目の当たりにする経験を経て、私たちが考えているほど、平和と軍隊の関係は単純ではないことがわかった。

全体を通して考えてみると、本実習の目的とは、韓国人と日本人がお互いに心を開いて心の底から正直に話し合うということであったと私たちは考えている。

2. 事前調査

2.1 日本側

日本側の事前調査として、参考文献を読み、日本人学生対象のアンケート調査を行い、市ヶ谷にある防衛省を訪問した。

（1）参考文献を通してわかったこと

・韓国と朝鮮戦争いまなお朝鮮戦争は終結していない。外勢によって朝鮮半島が分断されたまま軍事政権下で軍事文化を発展させてきた韓国。→**国防の義務の必要性：健康な男子全てが兵役の義務を負う徴兵制国家。**韓国の徴兵制は韓国人が望んで制定したものではなく北からの武力侵攻を防衛するために導入した。108 万人の北朝鮮に対抗するためにも、徴兵制を放棄できないでいる。

・国防の義務：①愛国心の発露という肯定的意味＝「私は、分断された祖国、大韓民国の国民である。それゆえ、大韓民国国民としての義務と権利を行使せねばならない」韓国社会ではいまだ､軍隊に行ってきたかそうでないかによって人を評価する傾向が残っている。②「義務」という否定的意味＝失われた時間・青春の墓場・人生のブラックホール

・軍隊についての韓国内での賛否両論

・軍隊での訓練

・軍隊内での生活

・入隊するまでの経緯

・軍隊経験者と未経験者への社会の視線（芸能人や富裕層の子息が米国籍を取得したり、手回しをしたりして免れようとした例）

・軍隊、軍事文化が韓国社会に対して与えている影響

（2）自衛隊について：防衛省を訪問して

○自衛隊とは…

・1954 年 7 月 1 日に設立された日本の防衛組織。

・法令においては、国軍（軍隊）という位置づけではない。＝あくまで防衛するための組織。戦力としての組織ではない。

・内閣総理大臣が最高指揮監督権を持ち、防衛大臣が任務を統括する。＝シビリアンコントロールの原則

・自衛隊の活動は防衛出動、災害派遣、治安維持、広報などの多岐にわたっていて、それらの出動命令などは自衛隊法によって定められている

○市ヶ谷基地（防衛省）を訪問して

防衛省の敷地は約 23 ヘクタールあり、自衛官を含め、約 1 万人の職員がそこで働いている。今回の見学コースでは庁舎にはほとんど入れず、市ヶ谷記念館（自衛隊の歴史や戦前の様子についてのものが展示されている場所)､メモリアルゾーン(自衛隊殉職者の慰霊碑、雄健神社跡、記念碑などが設置されている場所)、屋外ヘリ展示場などをメインに回った。全体的な印象としては、古いが趣があるつくりできれいだった。隊舎や庁舎を見学するこ

とはできなかったが、休憩する際に入った厚生棟と呼ばれる場所には食堂や売店、スターバックスまであった。すれ違う人々は軍事服や、迷彩柄のような服を着ていたし、車もいかにも軍用といったものが多く眼に着いた。しかし、ピリピリした空気はなく、現代的で驚いた。

2.2 韓国側

軍隊を訪問したいという日本側の希望にこたえるため、韓国の陸軍士官学校に依頼して訪問日程を予約し、最前線を訪問するために見学の日程を準備して非武装地帯の中に位したドラサン見学コースを利用して行って来る計画を作った。また、日本側で軍隊を経験した人と、一般の学生にインタビューしたいという要望があったので、高麗大学の知人にお願いインタビューができるように準備した。その外にもさまざまな文化体験のためにいろいろな所を訪問することに計画を作った。

参考文献を通してわかったこと

自衛隊について

○自衛隊とは…

・1954 年 7 月 1 日に設立された日本の防衛組織。

・法令においては、国軍（軍隊）という位置づけではない。

・任務としては「我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つために、直接侵略および間接侵略に対し、我が国を防衛することを主たる任務年、必要に応じ、公共の秩序の維持に当たる」（自衛隊法第 3 条第 1 項）ということ。

＝あくまで防衛するための組織。戦力としての組織ではない。

・陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の三つがある。

・内閣総理大臣が最高指揮監督権を持ち、防衛大臣が任務を統括する。

＝シビリアンコントロールの原則

・自衛隊の活動は防衛出動、災害派遣、治安維持、広報などの多岐にわたっていて、それらの出動命令などは自衛隊法によって定められている。

3. 韓国での野外実習

１日目　陸軍士官学校訪問、軍隊経験者へのインタビュー及びディスカッション

〈陸軍士官学校訪問〉

野外実習一日目は、将来陸軍の幹部の軍人になる予定の人々が学んでいる陸軍士官学校を訪問した。そこでは、展示館の中をまわったり、野外にある戦闘機を見たり、陸軍士官学校や韓国の軍隊についてのビデオを見たりした。

展示館では、士官候補生の一日の生活や、士官学校で行われるスポーツ大会や研修旅行の様子についてのパネル展示、また歴史的な品物や軍隊に関する道具や軍服、訓練に使用

する服、式典で着用する服などが展示されていた。パネルを通して、士官学校では訓練がベースとなっているが、大学で学べるような語学や教養などの授業もあることを知った。一日の生活パターンはきちんと決まっていて、実際に士官候補生が寝泊まりする部屋が再現されて展示されているのを見て、それなりの広さがある一人から二人までの部屋で生活している様子がイメージできた。また、士官候補生たちが参加する楽しそうな行事なども意外と行われていることがわかった。

外で展示されている戦闘機には、戦車やヘリコプターなど実際朝鮮戦争で使われたものが多数置いてあって、何か重みや年期を感じられた。

ビデオについては、陸軍士官学校の歴史や活動、朝鮮戦争での軍隊の様子、現在の士官候補生のインタビューなどにまつわるものであった。特に士官候補生のインタビューが印象的で、彼らの祖国韓国を守るということに対しての熱い心が見えた。

またガイドの方や韓国人の学生たちの話を通して、士官候補生たちは韓国におけるエリートであり、将来の軍隊を引っ張って行く重要な存在であるということを感じた。

〈軍隊経験者へのインタビュー及びディスカッション〉

陸軍経験者にインタビューする機会があると聞き、それに先駆け日本での事前調査として以下５つの質問を日本の学生に行った。

①国に徴兵制があった方がいいと思いますか?
②なぜそう思いますか?
③自分の国が平和だと思いますか?
④なぜそう思いますか?
⑤今、戦争が起きたらどうしますか?

同じ質問を、インタビューの際にも行おうとしたが、一問目の質問から始めた段階でこの質問はまったく意味のないものだと感じた。私たちは単純に意識を探りたかったのだが、なぜ日本人の私たちがその徴兵制の有無を聞いてくるのか些か質問の意図がわからない、というような印象を韓国の学生から受けた。なぜならば、問うべきは徴兵制の有無ではなく、なぜ軍隊が存在しているのか、その現状についてどう思っているのかといったことだったのだ。韓国では、徴兵制は、兄、弟、父親、夫、息子、彼氏、自分の身近な男性全てが経験するものであり、決して自分から切り離せない、「当たり前のこと」という認識のようだった。このインタビュー及びディスカッションでは、軍隊が自分の日常に存在していないことで（日本には軍隊がないと思っていることで）平和を感

じている私たちと、軍隊が日常に存在していてそれによって守られていると感じている韓国の学生たちの意識の違いがはっきりしていた。違いばかりが目立つ討議のなかで、最終的に軍隊はよくない／暴力はよくないというのは一種のきれいごとであり現実の問題を見ていない、もしかしたら必要なのかもしれない、平和にもいろいろな形がある。ということにいきついた。
軍隊経験者と話をしてみて、軍隊生活そのものだけでなく、日本人がどう視られているのか、ということを意識することができた。アジアの平和について触れた際に、「アジアの平和を乱したのはそもそも日本なのに、どうして日本人がアジアの平和について言い出せるのか。」と言われた。アジアの中での日本、日本人という制約のようなもの、日本人であるということがアジアにおいてどういうことなのか、「平和」とは簡単に口に出して言えない言葉なのか。様々な疑問や思いが頭の中を巡ったが、こういった他国からの正直な視線は、日本にいるときにはわからないことだと思う。こういった意見を聞けたことだけでもこのインタビューは有意義だった。

2日目　朝鮮半島分断という事実を目の当たりにして

2 日目の実習では朝鮮半島分断というテーマのもとで実習を行った。ソウル駅に集合し、臨津江駅へと向かう。臨津江駅はソウル駅と平壌駅との間にある。

臨津江駅で電車を乗り継ぎ、ドラサン駅へと向かう。厳しいセキュリティーチェックを駅で受けるたびに、朝鮮半島分断という言葉がだんだんと私たちの胸の中で重いものとなってくる。ドラサン駅からは用意されているバスで見学を行う。

まずは北朝鮮が冷戦後に韓国侵略のために掘ったトンネルがある。今まで発見された南侵トンネルは 4 本あり、西部前線地域に２本、中部前線地域に 1 本、東部前線地域に 1 本発見されている。今回はこれらのトンネルのうち、1975 年に発見された第 3 トンネルを見に行った。この第 3 トンネルはソウルからたった 44km しか離れておらず、発見時には韓国社会を震撼させた。第 3 トンネルの中はまるで遊園地のアトラクションのような乗り物に乗って下っていく。観光地化されているトンネルを見て、軍事文化が抱える悲しみを感じ

た。撮影は禁止されていたため写真がないのが残念だが、暗く、ひんやりとしていて、トンネルの目的を考えるとぞっとさせられる体験であった。

（トンネル入り口前においてあったモニュメント。割れた半島を人々が再びくっつけようとしている。）

第３トンネル見学後は統一展望台、統一村を訪れた。統一展望台では悪天候のためはっきりとは北朝鮮を認識することはできなかった。しかしながら、「目の前に広がる国は違う国である」という体験は強烈なものだった。日本のどこの空港から外を眺めてもそこは日本だ。おなじ朝鮮半島にあり、以前は１つだった国が分断されている。違う国がそこには広がっている。「分断」という紙の上でしか学んだことのなかった事実を目の前につきつけられた思いがした。

自由の橋。1953 年朝鮮戦争捕虜 12,773 人が自由を求め帰還したことに由来しており、自由への帰還という象徴的な意味が盛り込まれている。

4. 調査結果

２日間の野外実習を経て、軍隊に対する韓国の人々の意識や韓国の軍隊の現状が見えてきた。まず１日目には陸軍士官学校を訪問し、軍隊経験者との話し合いを持った。陸軍士官学校でみたビデオの中に、「韓国の未来は陸軍士官学校にあり、その未来とは朝鮮半島統一である」という言葉があり印象的であった。軍隊経験者との話し合いからは、日本がアジア諸国からどのような存在として見られているのか、また、軍隊が韓国にとってどのような存在なのかということを主に知った。軍隊経験者は軍隊に行くことで、人生に対する考えが変わるといっていた。「皆のために合わせよう。」「自分の上にも下にも人がいる。」など、我慢することを学ぶという。「自分に夢があっても、それが不可能であることがわかるようになる。現実的な人生を生きることができるようになる。」とも言っていた。

平和について話したいという私たちに対して、彼らは次のように語り始めた。自分自身も軍隊に行く前、暴力はいけないと思っていた。しかし軍隊に行ったあと、その考えは変わったという。国は力で守らなければならず、それが暴力であるのは仕方ないことだ。暴力とは軍事力そのもののみを指すのではなくて「現実の問題を知らない」という無知も暴力であるという。軍隊に行ってその無知が自分からは取り除かれたし、無知な人のほうがよっぽど危険だと今では思う、と。

2日目にはDMZと呼ばれる38度線付近の非武装地帯で統一村や第三トンネルの見学をした。見たもの、聞いたこと、すべてのものが想像以上に重いものであった。とくに非武装地帯では、「ここからが北朝鮮、ここまでは韓国」ときっちり区分けされている現状を目の当たりにして、過去は一つであった、民族の面から見たら同じである人々、そして韓半島が分断されているということを実感した。また、北朝鮮が韓国側への侵攻のために作られたとされる第三トンネルは戦争や侵略というものが日常に密接にかかわっていることを感じざるを得ない場所であった。私たちが見学したのは三番目（1978年10月）に発見された第三トンネルだが、これは長さ1,635m（1200mは北、435mは南に延びる）幅２m、高さ２mで、北朝鮮の完全武装した兵士３万人が１時間以内に移動できる規模だ。当時の北朝鮮の南への侵入欲の強さがうかがえるが、韓国の学生の中にはこの存在を知らなかった人もいた。確かに発見されたのは彼女たちが生まれる前のことだが、教科書に載ったりテレビや家庭で話題に上ったりはしないことなのだろうかと疑問に思った。韓国の学生たちは往々にして統一を望んでいるようだった。その理由を聞いてみたが、あまりはっきりした答えは返ってこなかった。もちろん、統一すれば徴兵制がなくなる可能性が高いから、というのはあるようだは、それ以前に、うまく説明のできない当たり前の感情なのかもしれない。そして、韓国の女の子たちはあまり軍隊や戦争について普段は意識してないようだ。日本人でしかも女の私たちが、なぜ軍隊に関心を持ったのかと不思議がっていたくらいだ。軍隊は男のもので、韓国の女の子は日本の女の子とあまり変わらないのかもしれない。しかし、日本の女の子と違うのは、漠然とでも、いま戦争が再発したらどうするかという考えを持っていることだ。日常生活においては軍隊を意識していないが、いつも頭のどこかに戦争のことがあるようだ。

〈アンケートについて〉私たちは、日本人と韓国人対象にアンケートを行った。アンケート内容は以下のとおりである。ここではソウル大学の軍隊経験者に行ったアンケート結果について述べたいと思う。

Q1　国に徴兵制があった方がいいと思いますか。Q2、なぜそう思いますか。Q3、今、日本は平和だと思いますか。Q4、なぜそう思いますか。Q5、今戦争が起きたらどうしますか。

Q1 に関しては、ほぼ全員がいいえと回答した。あった方がいいと回答した理由として、戦争に派遣するかどうかは別として、自国や周りの国に対して意識が向くようになる、平和についてより考えるようになると思うから。というのがあげられた。これをうけて、韓国の若者にはこれらの意識が日本の学生より高いのかどうか、インタビューの際重点的に質問をした。徴兵制で軍隊生活を経験したことが，愛国心につながっていますか／という問いを投げかけたところ、返って来たのは「いやそうではない・・・。」と少し濁した回答だった。どういうことか深く追求すると、軍隊での生活は本当に心底辛い。だから何かしら、何かのためにやっているんだ、このやっていることが役に立つんだ、と思うしかない。それしか選択肢のない状況に追い込まれる場所，それが軍隊なのだ。と言う。あくまでも「強制的にそう思わされている」ということを強調していたのが印象的だった。愛国心で徴兵制を受け入れている人は一人もいない。と断言していたのも印象に残っている。その信義は如何であれ、自分の意見をこれほどはっきりと主張できる青年が日本にどれほどいるだろう。と考えると軍隊経験者の彼らが幾分も頼もしく見えた。また、直接には軍隊生活を体験するわけではないが、彼や夫、兄弟を通してそれを経験する女性の考えも合わせて調査した。徴兵はふつう大学２年ー３年の間に始まり、入隊中は休学することになる。その間、女性はそのまま卒業し、同級生の男性よりも早く社会に出ることになる。最近では、男性が入隊のために休学している時期に、留学やワーキングホリデーに行くなど、外の世界を見ようとする女性が増えているそうだ。男性が休学して違う世界（軍隊）で経験を積んでいるのだから、私たちも何か経験を積みたい、との思いがあるようだった。残念だったのは、実習中のインタビューでは韓国人同士の男女の活発なディスカッションが見られなかったことだ。「軍隊」に関して女性が頻繁に口出すものではない。という風潮があるように見えた。

5. 考察

5.1 日本側

今回の実習は各班員にとって大変貴重なものであった。それぞれが今回の韓国実習に見出した意味や体験したこと、最も印象的だったこと、学んだこと考えたことも異なる。そのため、考察は、個人の体験を尊重し、あえてまとめなかった。

〔斎藤〕セミナーの前の事前学習の段階では、韓国における軍隊の存在意義をきちんと理解できていない状態で、軍隊＝平和とは対極にある存在という風に認識していた。しかし、実際に韓国に行き、陸軍士官学校や DMZ（38 度線付近）を訪問したり、韓国人の軍隊経験者の方々や同徳女子大の学生たちと話し合ったりしていくうちに、韓国の人々にとって軍隊や戦争というものは日常に実際に存在する、意識せざるを得ないものだということを感じた。日本では平和ボケといわれるように、実生活で自衛隊や戦争を意識することはほとんどない。そういう風に軍隊や戦争を意識することがないことによって、日本人は平和を

感じられるのである。その一方、韓国はいまだに朝鮮戦争の休戦状態であるということがあり、軍隊でも徴兵制がとられていて、日本よりもはるかに軍隊というものを身近に感じられるのである。軍隊というものは韓国の人たちにとっては、日常にあるものであり、平和な生活を保つためには必要不可欠なものなのである。

軍隊が自分の日常に存在しないことで平和を感じられる日本、軍隊が日常に存在していて守られているということを意識できることによって平和を感じられる韓国。平和の形にも文化や歴史による価値観の差が表れているのを感じた。

〔田平〕心に残っている呼びかけがある。

「アジアの平和を壊したのは日本人なのだから、その日本人がアジアの平和について言い出すのはおかしいと思う。」「私たちは日本に原爆が落ちてよかったと思っている。日本人も痛みを知ることができたから。日本に原爆が落ちても、韓国人にとってそれが痛くも痒くもないように、朝鮮半島が分断されていても、日本人は痛くも痒くもないのだろう。」

冒頭の二文のうち前者は、軍隊経験者でソウル大学日本語学科3年生とのディスカッションの際、日本人側が「平和について話したい」と言い出したときに返された言葉だ。

後者は、最終発表の際に同徳女子大学の日本語学科教授に怒りをこめて言われた言葉である。私は祖母が被爆者だ。祖母の記憶を聞き、平和資料記念館を毎年のように訪ねることで、原爆という〈記憶〉は私の中にしっかりと受け継がれている。原爆を取り扱った『夕凪の街、桜の国（こうの史代作)』という漫画がある。そのなかで被爆したが生き残った主人公はこう回想する。

「誰もあの事を言わない　いまだにわけがわからないのだ　わかっているのは「死ねばいい」と誰かに思われたということ　思われたのに生き延びているということ　…（略)」

「死ねばいい」と思われた、という被爆者の記憶。そして「死んでよかった」と今も思われている、という被爆者、そして私の記憶。「死んでよかった」という韓国の教授の記憶。これらの記憶はどれも途方もなく重いものだ。

この呼びかけを受けた当初は衝撃が強かった。頭が真っ白になり、いつのまにか涙が出て震えがとまらなかった。祖母の顔や原爆資料館で見た遺物が頭を駆け巡った。しかしそこにアジアの戦争被害者の姿はないことにふと気づいた。今まで日本が半世紀以上〈忘却〉という態度をとり続けていたように、私も彼らの〈記憶〉に対して無意識ながらも忘却しつつあったのかもしれない。私には知らないことが多すぎる。そしてそれらの多くは知らなくていいことではない。呼びかけられて初めて気づいたのだ。

戦争被害者が持つ〈記憶〉という責任に向き合うのは決して生易しいことではなかった。何度も目をそらしたくもなった。しかし実習を終えることができたのは、パートナーであった韓国人学生が、私たちに「呼びかけ」続けてくれたからである。半世紀以上たち、〈記憶〉と向き合うことがまだできていない日本人にまだ呼びかけてくれる人々がいる。呼びかけに対して応えるチャンスを与えてくれる人々がいる。

〈記憶〉と向き合うことは決して簡単ではない。韓国実習で身をもって学んだ。しかし呼びかけてくれる人々がいる限り彼らの〈記憶〉と真に向き合うということに私は挑戦し続けたいと思う。今回の実習は私にとって貴重なスタートである。

〔豊永〕今回の実習で、忘れられない言葉がある。それは、私たちがアジアの平和について触れた際に、軍隊経験者の一人が言った「アジアの平和を乱したのはそもそも日本なのに、どうして日本人がアジアの平和について言い出せるのか。」という言葉。日本人で、しかも女性で、大学生で。どういう風の吹き回しで興味を持ったのか？という疑問ももたれていたと思う。これは同徳女子大学の学生たちも思っていたことだろう。軍隊とは平和と相反するもの、というイメージばかりだったが、今回の実習を通して平和と軍事は切り離して考えることができないと思うようになった。韓国における徴兵制は、一つには朝鮮半島は未だ朝鮮戦争の休戦中であるために存在している。韓国を訪れるまでは意識していなかったが、韓国はいつ再び開戦することになってもおかしくない状況にあるのだ。考えてみれば、徴兵制があるのは隣国韓国だけではない。永世中立国であるスイスは武力によって永世中立を維持してきた重武装の国家として知られている。国民皆兵を国是としており、徴兵制度を採用して正規軍の他に、多数の成人男子が予備役もしくは民間防衛隊として有事に備えている。（スイスの徴兵制は 20〜30 歳の男子に兵役の義務があり女子は任意。）スイスの場合は、四方を他国に囲まれ、地の利があまりよくないことや資源に恵まれていないこともあるだろうが、とても賢い策をとっていると思う。軍隊が存在していても平和な国はあるのだ。軍隊がないから平和、軍隊があるから平和ではない、という判断はできないと思うようになった。そして平和について考える際には必ず何が平和か、という疑問も付随してくる。この疑問に対する答えは私自身の中でまだみつかっていない。私たちが事前学習の一環として行った日本人学生へのアンケートによると、日本はいま平和だ。答えがあるのかどうかすらわからないが、平和であるかどうかは、そこに暮らす人々がどう感じているかが一番のポイントだと思う。また、韓国における軍隊を考え、調べていくと避けて通れないのは、分断の歴史であった。そしてそれを強く実感したのが、臨津閣（イムジンカク）を訪れたときである。－臨津閣は、1972 年南北共同声明発表直後に開発された韓国の代表的な観光地である。1950 年 6 月 25 日に勃発した朝鮮戦争と、その後の民族対立による悲しみが刻まれている各種建物と戦績記念物を通じて、分断の悲しみを振り返り統一を念願する統一安保観光地として、毎年 300 万人の観光客が訪問している。－（非武装地帯観光ガイドより引用）　韓国と北朝鮮、かつては一つの国だったという事実と供に今は分断されているという現状を目の当たりにした。分断の悲しみは、一緒に活動した韓国の学生たち一人一人の中にも見えたし、韓国社会それぞれの人々の心の中にあるということを感じた。実習全日程で寝食を共にしたホームステイの相手、Yoo-jin からは、彼女の行動や言動のすべてを通して韓国文化を肌で感じたように思う。韓国文化にはとても親近感が湧くものが多かった。最も印象に残っているのは、「シェア文化」だ。飲食店

で出てくるコップの数は客の数より少ない。コップだけではなく、様々な料理も一つの皿から自分のご飯の上へ持っていく。一人一品ではなく、全員でたくさんの料理を楽しむ韓国人。これからの生活に韓国式を取り入れたいと思った。

〔末永〕軍隊という重いテーマを選んだため、難しいことが多かった。日韓の学生はそれぞれ違う教育を受けて育ち、違う環境、違う立場にいるため、軍隊や朝鮮半島の分断や自衛隊などに対する認識も異なる。どちらが正しいとはいえないし、数日間の話し合いで解決する問題でもない。だから、韓国の学生と気まずくなってしまうこともあったし、目を背けたいときもあった。もっとやりやすいテーマにすればよかったと思ったときもあったが、ホームステイ先の友達に「この話し合いは大変だけど、日本人と韓国人が本当の友達になるには、必要なことだと思う」と言われたとき、このテーマに取り組んでよかったと思った。ホームステイをして、24 時間、1 週間も一緒にいれば、本当にいろんな話ができるし仲も深まる。だけど、二人の間に触れてはいけない日韓の問題が残るというのでは悲しい。

このセミナーでは、私たちのテーマである軍隊と平和について確かな答えは出せなかった。でも、このテーマに取り組んだこと、このテーマに韓国の学生が協力してくれたこと、韓国の学生たちと話し合えたことに意味があると思う。文化も人も似ているところが多い日本と韓国だが、その間にまだ問題はたくさんある。そんな中で、韓国人の本音で話せる友達ができたことは自分のこれからの人生の貴重な財産になるだろう。

5.2 韓国側

セミナーの初めのころ、アジアの平和のためには軍隊がなくならければならないと日本の学生たちは考え、韓国の中でも軍隊はなくなる方がいいと主張した。しかし、日本とは異なる韓国の特殊な状況をいろんな活動を通して日本の学生に見てもらい、軍隊が必要であるという韓国の現状を理解してほしいと思った。

韓国の日本とは異なる軍隊の制度である徴兵制度は朝鮮戦争による分断国家の影響を受けて起きた現象である。このような韓国の軍隊文化についてお茶の水女子大学の学生たちに野外実習を通して伝えることができ、同徳女子大学の学生たち、お茶の水女子大学の学生たち双方で、お互いに韓国の現状を理解し、また日韓の軍隊の存在意義の違いを知ることができる時間を持つことができたことを非常に嬉しく思った。

セミナーの間、難しい事も多かった。美容やファッションなどの他のグループのテーマより重いテーマを持つことによって、日韓の学生同士で意思疎通することがなかなか難しいこともあった。しかしセミナーを通して、いろいろ勉強になった。まず、軍隊や 38 度線付近などの最前線に行って来た事が大きい経験になって、今まで意識しにくかった韓国の分断問題を認識し、もう一度考えてみるきっかけになったし、日本の友達と多くの文化体験をしたということは良かった。

軍隊の存在は私たち韓国人にとってどんな意味を持っているのかを考えることすらないぐらいに、それは当然なものになっていたけど、日本側との調査を通して、私たちはこの国の分断された現実についてあまり深く考えていなかったなと自分の意識に気付いた。セミナー期間の中で雪岳山に行って来た事、そして一緒に 1 週間過ごした時間は決して忘れることができない思い出になった。今回の機会を通じて自分たちが韓国の軍隊に関して関心がなかったことを反省するようになった。そして何回も話し合ったことによって今回のテーマに関するお互いの誤解や日韓の違いにも気づいたし、逆に共感した部分も多かった。お互いの国に関する理解の幅を広げるきっかけになったと思う。

韓国の現状、分断国家のなかの軍隊の存在はどうしようにもないもので必要なものだ。もちろん平和のためには軍隊はなくなるほうがよいのだろうけど、今の韓半島の平和は軍隊があるということで成り立っているはずだ。このセミナーのなかで日本の学生たちが本当の平和というのは何であり、日本は本当の平和のためになにをできるのかなどについて心深く考えてもらえたならうれしい。

＜参考文献＞

こうの史代（2004)『夕凪の街　桜の国』16 ページ　双葉社
ユン・ジェソン（2004)『韓国の軍隊』　中公新書
渡部昌平（2007)『日韓つっぱり力』
高橋哲哉（1999)『戦後責任論』
防衛省・自衛隊　http://www.mod.go.jp/j/events/index.html
コネスト　http://www.konest.com/data/korean_life_detail.html?no=557

研究報告

日本と韓国の美容文化・意識の違い

本田　美央（お茶の水女子大学）
佐川　朋子（お茶の水女子大学）
박　성　희(Park Seong-Heui)　(同徳女子大学)
이　보　영(Lee Bo-Young)　(同徳女子大学)
성　연　승(Sung Yeon-Seung)　(同徳女子大学)
황　희　수(Hwang Hee-su)　(同徳女子大学)

1. 研究の動機と目的

日本で韓国の映画やドラマが流行ったときに、韓国の役者さんが整形手術をしていたことが、大きく取り上げられた。韓国では、整形手術はかなり広まっているようだが、日本では整形手術に対する抵抗感、マイナスイメージは多い。どうして整形手術に対しての意識がこんなにも違うのだろうか。

また、韓国では女性は「きれい」であることが求められるのに、男性はそうでもないそうだ。なぜ、こんなに男女の美意識に差があるのだろうか。

日本と韓国の美容文化を比較することで、互いの相違点と共通項を見つけ、美容文化のみならず両国の文化について深く理解をしていきたい。

2. 事前調査

2.1 日本側

[化粧]

日本が、「隠す」化粧としたら、韓国は「見せる」化粧である。日本は、そこはかとなく、あいまいなままににじみ出るような美しさを良しとする文化であり、これは辛抱強い「待ち」の文化である。また、日本では、かわいさ、若さ、さわやかさ、を重視したナチュラルメイクが多い。一方、韓国では化粧をすることで、自分らしさを強調し、普段とは違う自分の演出をしようとする。日本人とは違い、セクシーさや大人っぽさが重視されるようだ。

[整形への意識]

孔子の言葉に「身体紙膚、受之父母不敢毀傷孝之始也。」というものがある。これは、身体、髪、皮膚、すなわち身体すべては親から受けたもので、これを傷つけないように努めることが孝行のはじまりである、という意味である。この考えが日本人の刺青や美容整形に対する抵抗感につながっているのではないか。

では、なぜ、同じ儒教が普及した韓国では美容整形が普及しているのか。

日本人は「顔よりこころ」というように、いくら外見が良くてもこころがきたなかったらいけない、と考える。

これに対し、韓国人は「こころのきれいな人は顔も美しい」と考え、形の美＝内面美と考える。美を明瞭に形や外見にあらわすことを良しとし、形を嫌わないことを厭わないストレートな文化だと言える。これが、韓国で美容整形が普及している理由の一つではないだろうか。

また、日本人は「正面顔」への注目度が高く、平面的で平べったく顔を見るのに対し、韓国人は顔の奥行に注目する。日本人より立体的な美意識を持っている。これも、整形手術への意識の違いに通じるのではないだろうか。

［日本の美容文化］

日本でも整形手術をする病院、施設数は年々増加。しかし、整形手術への抵抗感が強い日本では、プチ整形が流行っている。たとえば、ヒアルロン酸を注入したり、レーザーでシミ取りをしたりする。

［男女の美意識の差］

日本の大学生にアンケートを実施。韓国でも大学生にアンケートを行います。事前調査として日本の大学生男女 40 人にアンケートを実施。同様に韓国でも同じアンケートを大学生男女 40 人にアンケートをいった。質問項目としては、①整形をすることに対して賛成か反対か、またその理由、②いつ頃から化粧をし始めたか(女性)、③日々のメイクにはどのくらい時間をかけているか(女性)、④一ヶ月に美容(化粧品・エステ・ネイルなど)に対してどのくらいお金をかけているか(女性)、⑤眉毛は整えているか、またその理由(男性)、⑥日本と韓国の芸能人男女６人ずつを挙げ綺麗だと思う人、かっこいいと思う人をそれぞれ一人ずつ選ぶ(男女)という６項目に渡って行った。その結果については４の調査結果でまとめることにする。

2.2 韓国側

日本の学生とメールのやり取りをしながら、グループ内で話し合った。明洞一帯の韓国の化粧品の店を見ること、韓国の学生が日本の学生に、日本の学生が韓国の学生に実際にメイクアップをすること、韓国の大学生にアンケートをとり、日本の結果と比較すること、を中心に 3 日間の計画を立てた。

韓国と日本の大学生のアンケート調査だが、日本の学生にはあらかじめ日本の大学生にアンケートを行ってきてもらった。わたしたちは、インターネット上で韓国の大学生に同じアンケートを行った。また、実際に若者のメッカといわれる弘大（ホンデ）と新村（シンチョン）でステッカー街頭アンケートも行うことにした。

7 日は天然ハーブ石鹸を作ることにした。天然石鹸の体験ができる場所を調べて電話とインターネットを利用し、値段と場所も考慮しながら、パジュにある、プロバンスという

ハーブ園に決めた。

また、ヨンサンにあるチムジルバンで韓国の伝統的な銭湯文化であるチムジルとスパを体験することにした。

そして、韓国では伝統的な、鳳仙花で爪を染める体験をすることにした。

最後の日は、韓国と日本のメイクアップ体験をすることにした。

3. 韓国での野外実習

8月6日　13：00～14：00　学校から新村に出発
14：00～16：30　新村でステッカーアンケート実施
16：30～17：00　明洞到着
17：00～18：30　明洞の見学
18：30～　夕食　ロッテデパートで冷麺

新村で行ったアンケートは2種類。1つは「自分が整形するとしたらどこをしたいですか。次のうちから選んでください。－目、鼻、顎、やりたくない」。2 つめは、「男性の化粧はどこまでなら許せる？許せると思うラインは？－日焼け止めまで、BB クリームを塗る、フルメイクをする」というもの。アンケート結果は4の調査結果で述べるとする。

韓国の方はボードを置いておくだけで、どんどんステッカーを貼ってくれました！日本でやったらきっと誰も貼ってくれないだろう…。韓国人の温かさに日本人2人は感激！！

＜新村でのステッカーアンケートの様子＞

8月7日　9：00　馬頭駅に集合。車でパジュに移動。
10：40～12：00　“プロヴァンス”ハーブ園の見学。昼食（キムパプ）。
12：00～13：00　ハーブ石鹸作り体験
13：00～14：00　ハーブ園見学
14：00～15：30　龍山へ移動

ドラゴンヒールスパでチムジルバンの体験。
鳳仙花で爪を染める体験
夕食

パジュのハーブ園でのハーブ石鹸作り。好きな型をまず選び、数種類のハーブ（レモングラス、ローズマリー、カモミール、ローズなど）の中から自分の肌に合ったハーブオイルを選ぶ。石鹸のもとを溶かしたものに、ハーブオイルと着色料を入れ、1 時間ほど固まらせてできあがり。

＜パジュ「プロヴァンス」ハーブ園＞

＜天然ハーブ作り体験＞

チムジルバン体験。塩の部屋、ピラミッドの部屋、ヒノキの部屋、氷の部屋など、実にさまざまなサウナがある。また、子供からお年寄りまでたくさんの人がいる。広いお風呂もあり、エステやマッサージ、ネイルの施設もあり、とても充実している。日本の温泉施設のようなもの。

ホールのようなところで、鳳仙花の粉で爪を染めてもらった。文房具店などで市販されている粉を水に溶いて、爪の上にのせ、乾くまでそのままでいる。十分に乾いたあと、手を洗うと、爪はきれいなオレンジ色に染まる。昔は本物の鳳仙花の花をつぶし、それを爪の上にのせ、鳳仙花の葉でくるんでそのまま一晩おいたそうだ。「初雪が降るまで、爪のオレンジ色が残っていたら初恋が叶う」という言い伝えもあるそう。なんてロマンチック！

＜ドラゴンヒールスパ　チムジルバン体験＞

8 月 8 日　10：30　学校集合

10：30～12：00　メイク体験

日本の学生は韓国の学生に、韓国の学生は日本の学生に

最近流行しているメイクを実際にする。

12：30～13：30　昼食（トッポッキ）

14：00～　報告会

4. 調査結果

日本で事前に行ったアンケートではまず整形することに対して 40 人中 18 人が反対で、主な理由としては「親からもらった顔を大事にすべき」という意見が一番多く、一方賛成派の意見としては「自己責任」「内面的にプラスになるのであれば構わない」という意見が多かった。また、男性に眉毛を整えているかという質問に対して日本人男性 15 人中 13 人が「身だしなみとして必要」という理由で整えているという結果が出た。綺麗だと思う、かっこいいと思う芸能人は男性が玉木宏、ウォンビン、女性が宮崎あおい、キム・テヒが一番多い結果となった。これは韓国も同様の結果となった。しかし韓国では整形に反対する人は 40 人中わずか 6 人という結果であった。また、眉毛を整えているかどうかの質問に対しては 10 人中 10 人全員が整えていないという驚くべき結果が現れた。

次に新村で行ったステッカーアンケートの結果であるが、やはり整形したい部分は「目」という意見が一番多く次に「鼻」が多かった。「したくない」という意見は少数であった。また、男性の化粧はどこまでなら許せるかという質問では圧倒的に「日焼け止め」という意見が多かった。しかし私たちは何と言ってもこユニークな質問を考えた韓国の学生に驚いた。

5. 考察

5.1 日本側

事前に行った日韓でのアンケートから整形大国と呼ばれる国と、整形に対して抵抗感を持っている国の民族の考え方の違いがわずか 80 人へのアンケートであっても顕著に現れたと読み取ることができたのではないだろうか。実際にこのアンケート調査や実際のメイク体験、更には街を歩いていて気付いたのであるが韓国の女性はファンデーションもアイメークもほとんどしていない人が多く、日本人のようにフルメイクで自分の元来の顔を隠すことをする人は見受けられなかった。化粧をしなくても皆肌が美しいためファンデーションを塗る必要がないのだろうと感じた。やはり、その一つの要因として食生活も関係しているようであるが、今回身近に感じることが出来たのは、チムジルバンやエステや垢すりなどの施設が普及しており、気軽に人々が利用できる環境が整っていること、またありとあらゆるところにコスメショップが立ち並んでおり化粧品だけでなくスキンケアグッズが安価で手に入ることである。実習でも色々なお店に入りその値段や使い易さに日本人２人は驚きの連続であった。短い期間であったが何といってもあの炎天下の中ヘトヘトになりながらアンケートを行ったことや、私達が行きたいといった場所や食べたいものの要望をすべて叶えてくれたことへの感謝の気持ちは言葉では表せないだろう。ほとんど話せない韓国語であったが、何とか単語だけでも覚えて伝えようとする姿勢を理解してくれ今後も絶えず勉強を続けて行こうという意欲を掻き立ててくれたように思う。

言葉こそ違うものの日本のアイドルやドラマの話で盛り上がったり、時には恋愛話に花を咲かせたりとまるでずっと知っている仲の良い友達のように接することができた。これは、韓国の学生たちが日本という国や文化を受け入れてくれているからこそなのではないだろうか。今回、竹島問題が話題となっていて日韓の関係が危ぶまれていた中のセミナー、ましてやホームステイなど出来るのだろうかと不安で一杯だった。しかし、一週間生活した中で感じたこと、それは韓国という国は「温かい」ということである。ホームステイの家族も帰国する前日には、私を「家族」と言ってくれ思わず胸がジーンと熱くなった。とにかく、書き表せないことばかりであるが今回のセミナーを通して勉強はもちろん、それ以外の多くのことを学ぶ貴重な、そして有意義な実習であったと思う。今度韓国の学生が日本に来た際には自分に出来るおもてなしを精一杯したいと思う。

5.2 韓国側

まず、計画を立てることさえ簡単ではなかった。どんな体験をすればいいだろうか。短い時間でたくさんのことを見せなければならないのに、どうすればいいのかと毎日考えた。様々な活動のために、事前に費用を計算し、場所を調べた。計画通りにうまくいったこともあったし、逆に大変なこともあったが、事前準備を通して、私たちも韓国の美容文化について改めて学んだ。日本側とのメールのやりとりで、日本語の勉強にもなった。

日本語の語力が足りず、時々分からないこともあったが、話し合ううちに、日本の文化

について知ることができた。日本の学生にも韓国の文化について知ってもらう良い機会になったと思う。日本と韓国の文化の理解が深まった。

蒸し暑い日に、苦労しながら、アンケートを行った。アンケートに協力してくれた韓国の人たちに感謝の気持ちを表した日本の学生が想い出す。ハーブ村で一緒に過ごした石鹸作りも、暑いチンジルバンの中でも楽しそうに話したことも記憶に残る。真夏の天気にも関わらず、野外で行われた活動は大変だったが、我慢していつも笑いながら私たちがミスをしても理解してくれた日本の学生にもお礼を言いたい。

様々な活動を日本の学生と一緒に行い、とてもよい経験になった。なによりも、日本の学生ととても良い友達になれた。韓日セミナーが夏休みの間にしたことのなかで一番印象に残った意味深い活動だった。

＜参考文献＞

大坊郁夫（2001）『化粧行動の社会心理学』北大路書房

四方田犬彦（2003）『大好きな韓国』ポプラ社

朝鮮日報　http://www.chosunonline.com

日本商工経済研究所　http://www.shokoken.co.jp

Valette, R.M. (1986) The culture test. *Culture Bound*. Cambridge University Press, 100-120.

Robinson, N.(1985) *Cross cultural Understanding*. Pergamon Press.

総括

多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性

西岡　麻衣子（同徳女子大学大学院日語日文学科修士課程）

1. はじめに

現在のグローバル時代において、私達は多様な文化背景を持つ人々と関わり、有効な人間関係を築き、共生する能力が求められている。このような背景のもと日韓大学生国際交流セミナーは「文化リテラシー（文化を読み解く能力）の育成」を目的に、日本のお茶の水女子大学と韓国の同徳女子大学校において開催され、今年で 5 回目を迎えた。今回筆者は、2008 年 8 月 5 日から 8 月 12 日まで韓国のソウルで開催された第 5 回日韓大学生国際交流セミナー（以下交流セミナー）にアシスタントとして参加し、両国の学生（中国の留学生含む）が直接出会い交流しながら、体験に基づく協働研究と研究生活の中で、どのような学びや気づきがあり、どのように文化理解を深めていったのかについて、お茶の水女子大学との共同調査から分析・考察を行い、交流セミナーを通した体験型交流学習[1]の有効性と問題点を探った。本稿は今回の交流セミナーの総括としてその調査結果と考察をまとめたものであり、今後の交流セミナーのあり方や方向性について一提案を試みたものである。

2. 第５回日韓大学生国際交流セミナーの特徴

本年度で５回目を迎えた日韓国際交流セミナーは、両大学の先生方の熱意により、従来の「研究発表型」セミナーから「体験型」セミナーへと大きな転換期を迎えた。その狙いは「教室で両国の文化を知識として学ぶのではなく、体験に基づく協働研究（フィールドワーク）と共同生活（ホームステイ、合宿）の中で、人間関係やコミュニケーション、生活習慣に関わる様々な文化の異同に気づき、それを対話の中でいかに理解していくかといった点を重視したためである」（森山 2009 刊行予定）とされ、その移行は 2006 年に韓国で行われた第 3 回交流セミナーの全体日程との比較からも読み取ることができる。

まず、今回の交流セミナーは第 3 回の交流セミナーに比べ、グループ野外実習を 3 日に渡って設け、その時間を大幅に増やし、学生達が自ら設定したテーマの活動内容を十分に体験し仮説検証できるものとなっている（表 2）。そのため、来韓後すぐに実習が行えるよう、セミナー前からメールなどで活発に連絡を取り合い、意見交換し、事前準備を進めていた。直接交流の伏線としても、このような間接交流が学生たちの出会いへの期待を高めたことはいうまでもない。また、初日の文化体験プログラムや後半に設けられたソラク山合宿など、グループでの活動という限られたメンバーとの密接な交流に加え、全体交流の

場もプログラムの中に数多く組み込まれるなど、より体験型交流学習が取り入れられたスケジュールとなっていることが特徴としてあげられる。

表 1「研究発表型」から「体験型」へ

	第 3 回（2006 年）	第 5 回（2008 年）	
1 日目	13:30　日本側　韓国到着 14:30　同徳女子大学到着 17:30　時事日本語学院授業見学、夕食会	17:10　日本側　韓国到着 19:00　歓迎夕食会（仁寺洞）	日本側 ホテル宿泊
2 日目	9:30　開講式・オリエンテーション 10:00　研究発表テーマ 1「子供」2「食」 12:00　昼食 13:00 グループ別ミーティング 13:30　研究発表 3「結婚」4「美意識」 15:30　研究発表 5「ミュージカル」 6「江戸・朝鮮時代の女性」 18:00　全体歓迎会	9:00　開会式 9:30　韓日文化体験学習 ・日韓民族衣装試着 ・サムルノリ体験 12:00 全体歓迎会 午後　グループ別野外実習 「食文化」「伝統建築物」「外国語教育」 「ファッション」「美意識」「軍隊生活」	ホームステイ
3 日目	グループ別野外実習	グループ別野外実習	ホームステイ
4 日目	午前　報告会準備 14:00　野外実習報告会 17:00　総評	午前　グループ別野外実習 14:00　報告会準備 15:00　発表及び討論 17:00　総評	ホームステイ
5 日目	10:00　大学集合後、民俗村へ 11:30　民俗村観光 18:00　全体送別会	8:00　大学集合後、雪嶽山へ 13:00　雪嶽山国立公園 16:00　洛山ビーチ 18:00　お別れ会　研修院で宿泊	(2006) ホームステイ
6 日目	自由時間	9:00　朝食後、江綾船橋荘を見学 13:00　昼食後、五台山月精寺を見学 17:00 大学到着	ホームステイ
7 日目	10:30　大学集合見送り 日本側帰途へ	自由時間 （時事日本語学院見学）	ホームステイ
8 日目		10:00　鐘路集合見送り 日本側帰途へ	

（森山 2006/申 2008 より引用 改変）

表 2　グループ B「日韓外国語教育実態比較」野外実習スケジュール

1 日目	2 日目	3 日目
	8:00　大学 SWELL 授業聴講 12:00　昼食および 午後の予定確認	9:00　日本語学院で授業見学 11:00　意見交換 12:00　昼食
13:00 市の英語キャンプに到着 担当者へインタビュー 14:00　英語キャンプ授業見学 17:00　夕食および意見交換 19:00　明日の予定確認解散	14:00　英語村へ到着 KID プログラムへ参加 15:00　英語村・公演会観覧 17:00　夕食および意見交換 19:00　明日の予定確認解散	14:00　報告会準備 15:00　発表および討論 17:00　総評

※グループ B（お茶大側学生 3 名、同徳女子大側学生 5 名）が作成したものを引用改訂

3. 調査方法

3.1 調査対象者

調査対象者は第 5 回日韓大学生国際交流セミナー参加者 54 名で、同徳女子大学校からは日本

語科 32 名、メディアデザイン科 1 名、英語科 1 名の計 34 名 [2]。お茶の水女子大学からは多文化交流実習Ⅲ,Ⅳ受講者の文教育学部 17 名（中国国籍の留学生 1 名含む）、理学部 1 名、生活科学部 2 名の計 20 名である。

3.2 手続き

交流セミナー参加者が全プログラムを通じて、総合的に変容があったのかその有無を検証するため、お茶の水女子大学側の調査チームが作成した国際交流による文化学習調査のための選択式質問紙（以下、便宜的に「国際交流による文化学習調査表」）を使用した（セミナー前後に実施）。さらに、文化理解に関し参加者個々人にどのような気づきや変化があったのかの詳細を自由記述の内容分析で調査した。内容分析はセミナー後の記述式感想文（質問項目は過去の交流セミナーの感想文を参考に筆者が修正を加えたものを使用）を中心に行い、また内容分析の解釈の補助を得るために、筆者のアシスタントとしての観察記録と非公式のインタビューの記録を参考にした。

4. 調査の分析と結果

4.1 国際交流による文化学習調査の分析と結果

国際交流による文化学習調査表（お茶の水女子大学調査チーム 小林作成）は「韓国文化/日本文化について」「文化をテーマにした国際交流セミナーについて」「日本社会・韓国社会のイメージについて」に関する計 35 の質問項目に 5 段階評定で選択するものである。韓

国側には日本語能力と文化学習の関係についての「文化を学ぶ活動について」が加えられ、計 45 項目となっている。（質問項目の詳細は注 3 を参照）日本側は不備があった 5 名を除く 15 名、韓国側は不備のあった 5 名を除く 29 名を分析対象とし、t 検定（対応のある平均の差の検定）を行った結果、日本側、韓国側ともセミナー前後の平均得点に有意な差が認められ、交流セミナーの有効性が確認された。（日本側（t= -4.69,p<.01,自由度＝14）韓国側（t= -2.26,p<.01,自由度＝28））

表 3　セミナー前後における選択式調査表に対する回答総数の平均値

	日本側平均 N=15	t 値	韓国側平均 N=29	t 値
セミナー前	118.9	t=-4.69**	166.0	t=-2.26**
セミナー後	125.7		170.0	

＊＊　ｐ＜．０１

4.2 自由記述の内容分析と結果

日本側 19 名、韓国側 32 名が提出した感想文形式の自由記述から、多文化理解に関連のある気づきや変化についてのコメントを取り出し、内容的に整合性のあるものをまとめ、さらにそれらを「情緒」「認知」「行動」に 3 分類した[4]。分析項目は「セミナーの活動に関して（①文化体験プログラム②グループ実習③討論・発表会④ホームステイ⑤ソラク山合宿⑥その他の自由時間で学んだこと・感じたことについて）」と「セミナー全体に関して（有益だったこと、有益でなかったこと）」である。宮本・松岡（2000）にあるよう、情緒は「心」の部分に関する記述、認知は「頭」としての認識の記述であり、ここでは行動に技能も含め、自己のコミュニケーション行動を調整し、具現化させるためのストラテジーに関する記述として分類した。

表 4　セミナーの活動と全体の感想から得られた多文化理解に関する主な気づきや変化

	日　本　側	韓　国　側
情　緒	・楽しさ、優しさ、温かさ、思いやりを感じる・信頼感・不安感の軽減 ・心を開く・紐帯感・共感する・	・親しみや友情を感じる・偏見の除去 ・紐帯感・楽しさを感じる・心を開く ・共感する・尊敬心を持つ・自信を持つ
認　知	・両国文化の共通点と相違点の認識 ・相手文化を知る、認識する、理解する ・自己を顧みる　・共通性を認識する	・自文化への気づき・相手文化の理解 ・両国文化の共通点と相違点の認識 ・知識の必要性　・共通性を認識する
行　動	・友人関係構築・韓国語を操る・傾聴 ・非言語の重要性を知る・コンフリクトの重要性を知る・理解しようする意志を持つ・自分の意見を主張する	・友人関係構築・日本語を操る ・積極的、自発的行動・合意点を探る ・意見を明確に伝える・多様な視線を持つ・多くの人との考えの交換、共有

情緒面において、日本側の学生は「韓国人学生の優しさ、温かさを感じた」という記述が多く、今回が初めての渡韓や外国人と衣食住を共にする参加者が多い中、触れ合いの温かさを感じ、異文化との接触に勇気を得たことがうかがえる。他にも「皆で力を合わせて行動したことで、信頼が増した。」（信頼感）や「最初は不安だったが、体験だからこそすぐに文化の壁を感じることなく、お互いに打ち解けることができた。」（不安感の軽減）など、セミナー前に感じていた異文化に対する不安が活動を通して解消され、親交が深まった記述なども見られた。一方、韓国側も「一緒に長い時間を過ごし、苦労し、経験しながら親しみを覚え、情も生まれた。」など親しくなれた喜びや、友情を感じたという記述が多く、「日本人は情がないという偏見があったがその偏見をなくす機会になった。」（偏見の除去）などセミナーへの参加がステレオタイプを崩すきっかけとなり、国を超えた個人個人の心情のやり取りが成されたことが推察できるものとなっている。

認知面においては、日本側は「韓国の文化を知る、認識する、理解する」の記述が多く、「韓国における上下関係のありかたの認識」や「迷惑をかけあう文化（それを絆と感じる文化）を身をもって体験できた。」などがあったほか、発表・討論を通し、「自分達がどれほど無関心であったかに気がつけた。」など、自己を顧みる機会となったことも示されている。韓国側に至っては、自己を含む「自文化への気づき」が一層強くみられ、日本人学生と行動を共にするなかで、韓国事情・文化をわかりやすく説明するにはどのようにしたらいいかを模索しながら、自文化を顧み、理解を深めることの重要性や新しい側面の発見など全体的な気づきへと発展した様子がうかがえた。また発表・討論においては「日韓の差を改めて認識した。」という記述が多くみられた。

行動面においては日本側の特徴として、ホームステイを通して「言葉がほとんど通じなくても、熱心に相手の話に耳を傾けたり、相手の誠意に誠意で答えれば気持は通じることができる。」や「ジェスチャーが予想以上に通じて驚いた。」など韓国語能力の必要性を感じながらも、言葉が通じない環境ならではの「傾聴」や「非言語の重要性の気づき」を言及する記述が見られた。反面、韓国側は日本語科の学生が多いだけあり、「日本語能力の重要性」を言及したものが多く、深い理解のためには言語操作は欠かせないとして、今後の日本語学習への強い動機づけになっている。他にも「積極的に近づこうとしなければ外国人と親しくなれない。」など積極的行動の重要性を示唆する記述がみられた。表５は主な活動プログラムでの気づきを含めた感想を上位順に示したものである。

表 5　主な活動プログラムでの気づきを含めた感想（上位順）

<table>
<tr><th colspan="2">グループ実習</th><th colspan="2">発表・討論</th><th colspan="2">ホームステイ</th></tr>
<tr><th>日本(19 人)</th><th>韓 国 (31 人)</th><th>日 本 (19 人)</th><th>韓 国 (31 人)</th><th>日 本 (19 人)</th><th>韓 国(18 人)</th></tr>
<tr><td><よかった点>
①親しみや友情を感じる 6(32%)
①文化の直接体験 6(32%)
③深く話し合える 3(16%)
③観光では行けない所への訪問 3(16%)
⑤両国文化の共通点と差異点の認識 1(5%)
⑤自己の気づき 1(5%)
⑤不安感の軽減 1(5%)

<大変だった点>
①天候・移動などの環境面 6(32%)
②言葉やコミュニケーションの壁 4(21%)
③急な予定変更 3(16%)
④内容検討不足 2(11%)
⑤日韓の考え方の差 1(5%)
⑤意見の主張 1(5%)
⑤テーマと向き合う 1(5%)</td><td><よかった点>
①自文化への気づき 10(32%)
②両国文化の理解 8(26%)
③親しみや友情を感じる 7(23%)
③深く話し合える 7(23%)
⑤体験の共有 5(16%)
⑥知識や考えの共有 1(3%)
⑥日本語力向上 1(3%)

<大変だった点>
①天候や移動などの環境面 18(58%)
②日本語能力の不足 6(19%)
③内容検討不足 5(16%)
④私生活に影響 4(13%)
⑤テーマと向き合う 1(3%)
⑤見学先との交渉 1(3%)</td><td>①発表前のグループ討論やまとめ時間の必要性 6(32%)
②発表能力・伝え方の必要性 5(26%)
③深い研究の必要性 3(16%)
④自己への気づき 2(11%)
④意見調整の難しさ 2(11%)
⑥歴史的問題を扱う難しさ 1(5%)
⑥各意見をまとめられた 1(5%)</td><td>①両国文化の差の認識 10(31%)
②日本語能力の必要性 8(25%)
③発表前のグループ討論やまとめ時間の必要性 6(19%)
④深い研究と専門的知識の必要性 5(16%)
⑤発表能力の必要性 4(13%)
⑥日本人学生の発表能力への感心 3(10%)
⑦グループ間の紐帯感 2(6%)
⑧合意点を探る 1(3%)
⑧両国の溝を実感 1(3%)</td><td>①温かさを感じる 8(42%)
②韓国文化の理解 6(32%)
③韓国語の必要性 5(26%)
④非言語の必要性 4(21%)
⑤傾聴の大切さ 1(5%)</td><td>①日本文化の理解 9(50%)
②親しみや友情を感じる 5(28%)
③偏見の消失 4(22%)
④ステレオタイプの形成 1(5%)
④韓国文化の紹介 1(5%)</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td colspan="2">ソラク合宿</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td>日 本 (19 人)</td><td>韓 国(22 人)</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td>①より親しみや友情を感じる 7(37%)
②遠くて移動が大変 4(21%)
③韓国文化の理 2(11%)
③共通性の認識 2(11%)
⑤信頼の増加 1(5%)
⑤コンフリクトの重要性 1(5%)
⑤コミュニケーションの難しさ 1(5%)</td><td>①より親しみや友情を感じる 11(50%)
②日程が厳しい 6(30%)
③自分化へ気づき 5(23%)
④見学時間が短い 3(14%)
⑤韓日の共通点と差異点の認識 2(9%)
⑤日本人学生の準備能力に感心 2(9%)</td></tr>
</table>

※数字は言及した学生数と割合を示す

また「セミナーによる自分の文化/相手の文化に対する考え方の変化」の質問項目に対し、日本側は自分の文化に対して 19 名中 12 名（63%）が、相手の文化に対しては 19 名中 18 名が「変わった」に回答しており（1 名未選択）、100%近い確率で変化が起きたとしている。訪問した日本人学生にとっては、毎日が新しい経験であり出会いであったため、変化も顕著に表れたと思われる。一方、迎える韓国側は自分の文化に対しては 32 名中 20 名（62%）が、相手の文化に対して 32 名中 19 名（59%）が「変わった」と回答し、どちらも同程度の変化結果となっている。

日本側の自文化に対する変化の中で一番多かったものは「自文化の客観的理解」(6 名)で、

「普通・いい国・漠然としたイメージ、韓国とそう変わらない」から「細かい・清潔・豊か・ぜいたく・個人の空間を尊重する・内向的な印象・対立の際（中略）何でもごまかす・時間を正確に守る規則の整った社会」などの記述がみられた。他にも「想像以上に自分の文化を知らなかったことに気づいた」など他文化と接することで自文化を顧みる記述がみられた。一方、相手文化に対する変化は「韓国文化の客観的認識」(9 名)、「韓国文化へのプラスの変化」(3 名)、「両国の差の認識」(2 名)、「韓国内での多様性の認識」(2 名)「共通点の認識」(1 名)の順となっており、中でも「言いたいことをはっきり言う人が多いから少し苦手だったが、むしろそこに良さを感じた」など、直接の触れ合いを通して、相手の文化を認め、理解し、受け入れるようになった過程がうかがえる。

韓国側の自文化に対する変化の中で一番多かったものは「自文化へのプラスの変化」(9 名）で、「外国に紹介するものは特にないと思っていたが、素晴らしい伝統文化や建築物をあることに気づいた。」など、「誇らしい」や「自負心」を感じるという記述も見られた。他には「自文化の客観的認識」(7 名）に関する記述が多く、「軍隊生活」をテーマにした学生からは「平和と軍隊の関係、分断国家の現実について改めて考えるようになった」などがあった。一方、相手文化に対する変化の中では「日本文化へのプラスの変化」（10 名）が一番多く、「類似点の気づき」（3 名）「多様性の気づき」(2 名)「日本文化へのマイナスの変化」(1 名)の順となっている。プラスの変化では「近寄り難く、個人主義で、親しくなれない」という考えから「温かく、深く交際できる」などへの変化がみられ、多様性の気づきでは「日本文化は（中略）何か壁があると思ったけど、どんな国の人かより個人個人の特性があり、心を開けばそのようなこと（国籍）は重要でないと思った。」など共同生活を通して、個人の付き合いが成されているのがわかる。しかし、「日本人は親切だと思ったが、距離を置くことがわかった。」とマイナスに変化した記述もみられ、セミナーで出会った日本人、特にグループのメンバーや、ホームステイの相手との関係が今後の日本人観に大きく影響を与えてしまう危険性も見られた。

以上、ここでは特に認知面において多くの気づきがみられる結果となった。もちろん「変化しなかった」[5]と回答する学生もいたが、上述のセミナーの活動での気づきの分析結果などと合わせると総合的に、情緒面、認知面、行動面において多文化理解を促す様々な気づきや変化が確認され、体験型交流学習としての交流セミナーの意義が認められたということができるだろう。このような多文化理解態度や能力の形成は文化リテラシー、文化背景や文化の深層を掘り下げていく力（文化差異の気づき→各文化独自のコミュニケーションスタイルの理解→社会システムの解明→環境的・地理的影響の認識）の形成へと繋がることが期待され、体験型学習の可能性が十分に見出されたと言える。しかし、先のマイナスの変化の記述や他の項目の自由記述などから、少数ではあるが日本側からは「時間にルーズ、計画性がないので、予定通りに進まない。」などや、韓国側からは「やはり日本人と親しくなるには時間がかかる。」「日本人と会うたびに本当の胸の内を知りたいという思いを消すことができない。」など、逆にステレオタイプを強めてしまったり、個人から受けた印

象を一般化してしまう記述も見られ、体験型交流学習だからこその危険性やマイナス面が現れてしまったことも否定できない。そのようなマイナス面の原因も含め、次に考察を試みる。

5. 考察

5.1 先行研究の多文化理解との対照から考える

先述の自由記述の内容分析から抽出された各要素（表 3）は、多文化理解態度や能力に関する先行研究、 中でも特に石井らの示す異文化コミュニケーション能力の構成要素 [6]（石井他 1997 pp17-21）と重なる部分が多い。例えば　石井らの示す＜情緒/ 感情移入＞はここでは「共感する」や「紐帯感」、<情緒/ 非民族中心的態度>はここでは「尊敬心を持つ」、<情緒/ 非偏見的態度>はここでは「偏見の除去」などと共通する。同様に認知・行動・技能面においても共通のものが多々見られ、加賀美(2006）の多文化理解態度や山岸(1997）の異文化対処力おいても共通する部分があるなど、先行研究からも今回のセミナーが様々な気づきや変化をもたらし、多文化を理解するための態度や能力の形成に効果があったことが支持される。しかし、グループ実習や発表・討論における感想や気づきから、メールでの事前準備のやり取りや・意見調整の難しさ、発表の不満足さなどがあげられていることから、石井らの<技能/ 仕事遂行>能力は今後の課題であると思われる。多文化環境や異文化圏の人と、何かを成し遂げようとした場合、自文化環境や同文化圏の人との時と同じように、自己の持つ本来の能力を発揮することは非常に難しく、さらに卓越した予測能力と、それを支える柔軟性、寛容性を身につけることが求められると言える。

5.2 日韓比較から考える

自由記述や観察からの分析結果からみられる最も大きな相違点は、お互いの文化理解に関して韓国側が体験による理論の構築（知識の再構築）を目指している段階であるのに対し、日本側はまさに今回の体験から多くの気づきを得て、これらから解釈に入ろうとしているように見えた点である。つまり、体験学習のサイクルの循環過程（体験→新たな気づき・発見→分析→仮説化→試行　再び体験へ）において、韓国側が一歩リードしているようであった。（表５の「発表・討論」での日韓比較を見ても、差を認識し自分なりに新たな理論構築を目指した韓国と、体験した事に対する振り返りや共有の時間を希望した日本の様子がうかがえる。）これは韓国側のほとんどが日本語と日本文化を専門に学んでいる日本語科の学生であり、日本人や日本文化に触れることが今回初めてではなかったのに対し、日本側は準備として韓国語や韓国文化を学んだ学生たちが多く直接体験するのは初めてという点を考慮すれば当然のことであろう。しかしだからといって、韓国側が文化差の様々な要因までを体系的に理解していたかというとそうではなかったし、日本側においては知識がないからこその気づき（非言語の大切さや、非先入観的態度）がもたらされたという長点もあった。今後も、継続した体験型交流学習は両国の共通の課題である。また、訪問

する側と迎える側では求められる多文化理解能力も異なるため、教師や TA は体験学習のサイクルが円滑に循環するよう、以上のような両国学生の異なる面も十分に考慮したサポートの仕方が必要なのではないかと思われる。

5.3 マイナスの要因を考える

今回のセミナーにおけるマイナスの記述の要因は、不適切な期待感と交流の条件の問題が指摘できる。石井ら（1997）は異文化コミュニケーション能力の認知面の要素として「肯定的かつ現実的な期待」をあげているが、マイナスの感想を書いた学生に筆者は交流や日本人に対する多大な期待があったのではないかと推測している。初日の顔合わせの時に、人一倍張り切っていた彼女が最後には「やはり日本人と親しくなるのには時間がかかる」と残している背景には非現実的な期待感の裏切りによる、否定的な反応があったのではないだろうか。八代（1998）は異文化や対人関係における期待と態度の関係の認識の重要性を説いており、このような異文化トレーニングも体験型交流学習のマイナス面を回避する手段になると思われる。

また、韓国側から「日本側の学生たちが少しでも韓国に関心があったら、もっとお互い楽しめたのではないかと思う。私たちに「お任せします」という感じで。どこに行けばいいんだろうと少し困ってしまった。」という記述、（反対に「日本の学生が韓国の文化を積極的に知ろうとしてくれて有難かった。」との記述もあり。）の背景には、交流の条件の問題点が考えられる。ステファンは交流の仕方に関する条件の一つとして「接触は参加者が自発的に行うこと」、メンバーに関する条件の一つとして「できるだけ考え方の似ている人同士の交流であること」をあげている（八代 1998）。多文化理解の視点からすると考え方の相違は認められるべきであるが、少なくともこの場面においての「お互いに対する関心度」にあまり差があってはうまくいかないだろう。

このような条件を考慮した継続した交流と様々な状況下での様々なグループの交流が望まれる。

6. 今後の課題

以上、体験型交流学習としての交流セミナーの今後の方向付けを行うためには、以下の３つの課題が考えられる。

①交流の環境の整備

先のマイナス面の考察において、交流の条件の問題点を指摘したように、交流の環境を整備することが望まれる。「関心度」の他にもグループの人数の比率を指摘する声もあり、可能な限り同人数での交流の場の設定や、毎回グループの構成を変えるなど様々なメンバーとの交流が望まれる。また、円滑な事前準備やセミナー後の継続した交流のために、ホームページの作成によるネット上の間接交流の場の設定など全体的な交流の環境の整備が必要となる。

②振り返りの効果的な設定

体験学習のサイクルで最も大切なのは振り返りである。体験と理論の結合のためには、気づきの十分な考察による課題の明確化が必要であり、それには効果的かつ十分な振り返りが不可欠となる。今回のセミナーは体験そのものを重視した点で非常に意義のあるものだったが、その体験による気づきの共有や解釈が十分でなかった点が惜しまれる。（表５の「発表・討論」において両国から「発表前のグループ討論とまとめ時間の必要性」があげられており、気づきを深めたかったという学生の思いが読み取れる。）実習モニターシートや学習ジャーナルを導入し、毎回の実習ごとに振り返りの時間を設けるなど、学習者にその重要性をいかに意識させるかも含め、今後振り返りを十分に考慮した体験型交流学習が望まれる。

③ 教師とＴＡの関わり方

体験型交流学習において教師や TA の役割は、学習者が主体的に学べるプログラムや適切な環境づくりを行うことに重点が置かれる。つまり、基本的に黒子のようにファシリテーターとして援助者に徹するわけだが、適切な時期に、適切な学習リソースやスキャフォールディングの提供が必要となる。その際、各学習者やグループによって、それぞれ必要な支援が異なってくるため、その関わり具合の見極めや、臨機応変な対応が求められることとなる。そのような状況に対応するために、教師や TA はファシリテーターとしての知識やスキル、自律学習の考え、また異文化トレーニングに精通していることが望ましいだろう。そして何より、教師や TA 自身が多文化を理解する態度や能力を有し、多文化的視点を持った個人として学習者に関わり、共に成長しようとする姿勢で臨まなければならないと言える。

以上の課題は、アシスタントとして交流セミナーに参加し、体験型交流学習の研究を行う筆者自身が抱える重要な課題でもあり、今後多角的かつ複眼的観点からさらなる考察を深めていきたいと思っている。

また最後に、両国の学生からセミナーに対する具体的な要望として「日程の改善」を求める声が多かったことを付け加えておく。真夏の開催ということもあり「日程がハードで疲れてしまい、体験をきちんとできなかった部分があり残念だった。」などの記述も見られ、今後は（特にグループで野外実習の日程を考える際）、移動についても十分に考慮しつつ無理のない日程を組むことが望まれる。

7. おわりに

「つい４、５日前に会った学生達が一緒に笑い合ってるのは素敵だなと思った。」

ソラク山合宿でのある学生の感想である。セミナー参加者へ、自文化・他文化に対する多くの気づきをもたらした交流セミナーであるが、上述の通りその原点であり、その原動力は『共感』だと筆者は考えている。場を共有し、体験を分かち合い相互作用しながら学びへとつなげることができた今回の交流セミナーは、大変意義深いものであったと思う。

今回得た人間関係、発見、気づきを大切にし、試行錯誤を繰り返しながら今後さらなる発展へとつなげていってほしと思う。人を含め文化を『理解する』ということは楽しくもあり、また根気のいる作業でもあるが、取り組み続けることで日韓両国の学生が真の文化リテラシーを身につけ、グローバル社会で活躍する人材となるだろうことを期待している。

最後に、このような国際交流セミナーを企画されたお茶の水女子大学と同徳女子大学の先生方の教育に対する熱意に心から敬意を表すとともに、勇気と尊敬の念を持ってお互いを理解しようと努めた日韓の学生の皆さんに今後もエールを送り続けたいと思う。また観察者としてセミナーに参加する機会をいただいたこともこの場で感謝の意を表したい。今後筆者も多文化理解、文化リテラシーの育成に効果的な体験型交流学習の場をどのように提供すべきか、考察を重ね悩み続けようと思っている。

※本稿は2008年12月17日にお茶の水女子大学において行われた第3回国際日本語コンソーシアム日本語教育学部会での筆者の研究発表「多文化理解を目指した体験型交流学習の意義と今後の方向性～第5回日韓大学生国際交流セミナーを通して～」に加筆修正をしたものである。

〈注〉

1．交流学習には様々な類型があるため、ここでは交流学習の一つとして体験型交流学習としている。

2．34名のうち全てのプログラム（事前準備、文化体験、グループ実習、発表・報告会、ホームステイ、ソラク合宿）への参加者は13名、事前準備を除く全プログラム参加者は2名、ホームステイを除く全プログラム参加者は9名、ソラク合宿を除く全プログラム参加者は3名、ホームステイとソラク合宿を除くプログラム参加者は5名、事前準備・文化体験・グループ実習のみの参加者1名、ホームステイと発表・討論のみの参加者1名となっている。

3．①韓国/日本文化について（1.韓国/日本に興味がある 2. 韓国/日本文化が好きだ 3.韓国/日本文化に関する新しい知識を得たい。4.韓国/日本文化についてもっと体験してみたい 5.日常的に韓国/日本文化と触れる機会がある 6..韓国/日本文化を理解するのは難しい 7.韓国/日本文化と日本/韓国文化は似ていると思う 8.韓国/日本文化といっても個人個人の持つ文化はそれぞれ違う）

②文化をテーマにして国際交流セミナーについて（1.私はこの交流セミナーの中で日本/韓国文化を他の学生にわかりやすく伝えることができる 2.韓国人/日本人学生と日韓の文化を学ぶことで、日本文化/韓国文化についての新たな知識を得ることができる 3 韓国人/日本人学生と日韓の文化を学ぶことで日本/韓国文化を違った角度で見ることができる 4.この交流セミナーによって、積極的に他の学生と話す自信がつく 5.普段の授業よりも、この交流セミナーの方が積極的に授業に参加すると思う 6.このような交流セミナー

はお互いの文化を学ぶのに有効だと思う 7.このような交流セミナーをもっと多く経験したいと思う）

③日本社会・韓国社会のイメージ（1.日本社会は先進的だ 2.日本社会は規則を厳格に適用する 3.日本社会は集団の結束力が強い。4.日本社会は親しみやすい 5..日本社会は自由だ 6..日本社会はおだやかだ 7..日本社会は理解しやすい 8..日本社会はあたたかい 9.日本社会は男女平等だ 10 .日本社会は変化しやすい。※以下「日本社会」を「韓国社会」に変えて同一質問 10 項目）

④文化を学ぶ活動について（1.日本語学習と文化を学ぶ活動は両方重要だ 2 この日韓の文化を学ぶセミナーを通して、日本語の資料を読むことに慣れると思う。3.セミナーを通して、言いたいことを日本語で表現する能力が向上する 4.セミナーを通して自分の生活に役立つ日本語の表現を知ることができる 5.セミナーを通して日本語を話すのに自信がつく 6.セミナーによって発現する人の日本語を聞きとる能力が向上する 7.セミナーによって日本語を書く能力が向上する 8.セミナーによって自分の勉強に役立つ語彙を学ぶことができる 9.普段の日本語の授業よりも積　極的に参加し日本語を使うと思う 10 日韓の文化を通して日本語学ぶセミナーに積極的に参加したい）

4．「コミュニケーション能力は、認知、情意、行動の３つの側面に分けられる」との見解が、現在研究者間で一致したものであるという指摘(小山・川島 2001)や、異文化トレーニングにおいてもこの３つの側面からアプローチすることが一般的であることを受け、３分類を試みている。

5．「変化しなかった」と回答した学生の理由記述は、日本側は自分の文化に対し「日本の文化より韓国

の文化に目を向けていた。」「自分の文化に着目している暇がなかった。」などをあげている。一方、韓国側は自分の文化に対し「自分の国に対する考えが変わるには時間が短かった」、相手の文化に対し「自分の文化を感じることは多かった。しかし（中略）日本の文化に接する機会はほとんどなかった。」などの記述がみられた。文面通り、気づきや発見がなされなかったと受け取ることもできるが、文化の定義が各々異なるため質問項目の曖昧性の問題も指摘され、検討が必要である。

6．石井他(1997)は異文化コミュニケーション能力を主に「態度（認知・情緒）」「行動」「技能」「性格・その他」の４項目に分け、その構成要素をそれぞれ「態度」８つ（認知５、情緒３）、「行動」７つ、「技能」３つ、「性格・その他」９つに分けている。構成要素の詳細は『異文化コミュニケーション・ハンドブック』PP17-21 を参照。

＜参考文献＞

石井敏也・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編(1997)『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣選書

李徳奉(2003)「異文化理解教育の範疇と方向」『接触場面と日本語教育―ネウストプニーの

インパクトー』明治書院
お茶の水大学国際教育センター・文教育学部グローバル文化学環（2006,2007,2008）『グローバル時代における日韓の重要性　第 2,3,4 回日韓大学生国際交流セミナー報告書』
お茶の水大学国際教育センター・文教育学部グローバル文化学環（2009）『グローバル時代における日韓の重要性 第 5 回日韓大学生国際交流セミナー報告書』森山新「総評日韓の真の対話と交流への重要な新たな一歩」/申恩淨「第 5 回韓日大学生交流セミナー日程表」
加賀美常美代(2006)「教育的介入は多文化理解態度にどんな影響があるかーシミュレーション・ゲームと協働的活動の場合―」『異文化間教育』26、異文化間教育学会 アカデミア出版、pp.76-91
小山慎治・川島浩美(2001)「コミュニケーション能力の評価―評価者と尺度の文化的要因に関する実態調　査」『神田外語大学異文化コミュニケーション研究所　異文化コミュニケーション研究』13、pp15-29
津村俊充・石田裕久編(2005)『ファシリテーター・トレーニング自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ』ナカニシヤ出版
宮本律子・松岡洋子(2000)「多文化コミュニケーション能力尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』22、pp.99-106
八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子(1998)『異文化トレーニングーボーダレス社会を生きる―』三修社
山岸みどり(1997)「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育』11、異文化間教育学会、アカデミア出版会　pp.37-51

総括

日韓大学生国際交流セミナーの意義について
－第５回日韓大学生国際交流セミナーを通して－

金　秀惠（お茶の水女子大学大学院生）

1. はじめに

今回第５回日韓大学生国際交流セミナーは韓国側の同徳女子大学校で行われ、お茶の水女子大学の学部生 20 名（日本人学生 19 名、中国人留学生１名）が韓国を訪れた。参加者の中にはすでに２回目の参加になる学生もおり、韓国の学生との交流を楽しみにしている学生も多かった。例年通り４月から韓国側の学生とグループを組み、グループごとに１つのテーマを決め、調査・発表する準備を行ったが、今年はそれに加え、新たに参加者全員が一緒に合宿する時間も導入されるなど、積極的に交流を深める場も設けられた。本稿では、TA としてセミナー開催前の準備から直接関わり、担当教員を補佐しながら、学生を引率した立場から、交流型授業への参加者（お茶大生）の意識調査を通して国際交流セミナーの意義を具体的に探りたいと思う。

2. 調査方法

セミナーの前後に、日本と韓国の両国の参加者を対象にして日韓の文化についての意識及び交流セミナーの活動に関するアンケート調査を実施した。調査期間は渡航前に１回、帰国後１回で、アンケートの内容は「韓国文化について」、「文化をテーマとした国際交流セミナーについて」、「日本社会・韓国社会のイメージについて」の４段階評価、そして交流セミナーに関しての感想を自由記述で行った（アンケートの詳しい内容は資料として添付した）。

本報告では、このうち日本側のアンケート調査を分析する。なお、参加者 20 名中、中国人留学生１名は今回の分析には含めていない。

3. 分析

今回は国際交流セミナーの意義を探るため、交流セミナーに関して自由記述してもらった内容を中心にして分析を行い、アンケートから交流セミナーが持つ意義について以下のように分けることができた。

１）自文の文化、他文化に対する気づき

２）グループ活動への評価

３）自己評価の高まり

3.1 自文の文化、他文化に対する気づき

質問 3.1.1 セミナー前と後で自分の文化に対する考えが変わりましたか。

どのように変わりましたか。

結果は図１の通りで、「変わった」と答えた参加者は 14 名(79%)、「変わらなかった」が 4 名(16%)　無回答１名(5%)であった。

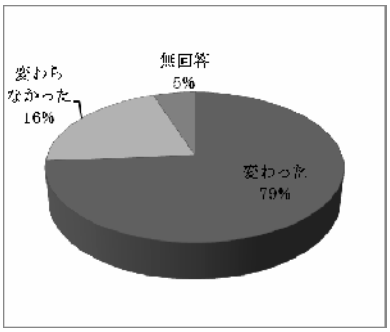


図１　セミナー後の自文化に対する変化

そのうち「変わった」と答えた 14 名の理由についての内容を見ると、以下のような回答があった。

＜セミナー前＞

・自分の文化を知っていると思っていた。

・自分の文化を知って、説明できると思っていた。

・漠然としたイメージしかなかった。

・(日本は) 韓国と文化が大変異なっている。

＜セミナー後＞

・自分の文化からよく知らなかったことが分かった。

・見直したいと思う自文化がたくさんあった。

このように交流セミナー前には「自文化をどのぐらい知っているか」「どのぐらい分かっているか」を意識したり、自身と向き合ったりすることがあまりなかったようである。しかし、今回の交流を通して、意識の変わった学生が多いことがうかがえる。これはセミナーで自分の文化を紹介・発表する時間があり、なぜそういう文化、考えがあるのかと考えることが質疑応答の時間に求められたからだと思われる。

質問 3.2.1 セミナー前と後で相手の文化に対する考えが変わりましたか。

どのように変わりましたか。

結果は図２のとおりで、「変わった」が 16 名(84%)、「変わらなかった」が２名(11%)、無回答が１名(5%)であった。

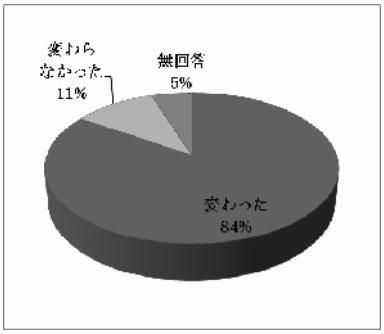


図２　セミナー後の相手文化に対する変化

「変わった」と回答した 16 名の記述を見ると、以下のような回答が見られた。

＜セミナー前＞

・日本と共通するところも多いのではないか。

・本の中での韓国の軍事文化しか知らなかった。

・日本と似ている、変わらない。

セミナー後は：

・日本と変わらない。

・日本よりあたたかい。

・文化を大切にしている。

・見直したいと思う文化がたくさんあった。

・日本と大きく違う。

相手の文化に対する意識変化の質問については、セミナー前後で「変わった」という答えは 84%で高い数値を表していた。交流セミナーに参加し、グループ毎にテーマに合わせて体験調査をしたり、ホームステイや合宿をしたりすることで相手の文化を理解することができる。また、豊富ではない相手文化に対する知識、理解でも、相手の文化に触れ、韓国人のパートナーと生活を共にすることで相手文化を見る自身の態度、理解を見直すきっかけになる可能性があると思われる。相手の文化に対する考えが「変わらなかった」と答えた参加者１名はその理由として、「相手の文化についてあまり分かっていなかったから」と答えた。

このように交流セミナーは自分の文化・相手の文化を理解・分かり合える機会が与えられることで、参加者は自文の文化、他文化に対する気づくことができる。

3.2 グループ活動を通して学ぶ

4 月に授業が始まってから、韓国側の学生とグループを組んでメールのやりとりを続けた。そして、韓国に着いてからは同徳女子大生と合流してグループ毎に協働で調査を行った。調査の発表にも参加者が積極的に参加した。以下はセミナー後のアンケートである。

質問 1.1.2 機会があればまたグループ実習をしてみたいですか。

結果は図３の通りである。

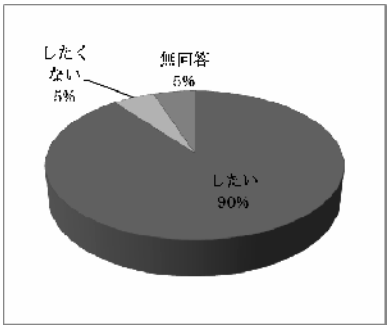


図３　今後、グループ実習に参加する意思の有無

今後機会があればグループ実習に「参加したい」と答えた学生は 18 名(90%)で、「したくない」という答えは 1 名(5%)、「無応答」1 名(5%)であった。この結果からわかるように、ほぼ全員がまたグループ実習に参加したいと答えており、今回のグループ実習について非常に満足していることが分かった。「参加したい」という理由として以下のものが挙げられた。

・多くの討論を通じて文化を超えた意見交換ができたから。
・新しい発見ができたし、自分も少し磨かれたと思うから。
・自分の成長のチャンスとなるから。
・学生の仲が深いものになる、仲良くなれるから。
・お互いのことが一番よく知れる活動だから。
・難しいけど大切だ。

今回のグループ実習を通して、お互いの意見を交換する過程で見分が広がり、相手の意見を尊重するなど、様々なことを学びあえる機会になったかと思われる。そして、同じ国の人だけではなく、他の国の学生と話し合う際に時々言葉が通じない場合もあったであろうが、お互い助

け合いながら一緒に課題を準備する中で、関係をより深いものにすることができたと思われる。

3.3 自己評価の高まり

質問 4 セミナー前に自分が設定した目標を達成することができましたか。
それはどうでしたか。

結果は表１のとおりである。

表１　セミナー後の達成感　　(単位：名)

よく できた	まあまあ できた	どちらとも いえない	あまりでき なかった	でき なかった	無応答	合計
8	7	2	0	0	2	19

「よくできた」、「まあまあできた」と答えた参加者の内容を詳細に見ていくと、

・明るく元気な街で暖かい人々に触れ、前向きになれた。みんなとすごく仲良くなれたいし、異文化に飛び込むこともできた。
・積極的に韓国側の学生とコミュニケーションを計ることができ、相手もそれに答えてくれたから。
・韓国の文化に触れ日本と比較できたから。
・グループで結論まで話しあいができなかった。

といった答えが多かった。

自分の目標の達成がよくできたと答えた参加者は日本文化や韓国文化について食文化のような素朴な疑問から韓国の軍隊に関する重いテーマまで様々なことを相手の学生と話すことができ、グループ活動を充実したものにすることができたことから達成感を感じたと考えられる。そして意見を交換するときに自分の文化を相手に理解してもらおうとする努力をしたこと、相手の文化も尊重しようとしたことでお互いの文化を見直すことができたようである。

どちらとも言えないと答えた参加者の理由としては「韓国語の勉強不足」、「目標を覚えていない」という答えがあった。

4. おわりに

上記の結果から国際交流セミナーの活動は参加者に有効な影響を与えていると考えられる。今回の日韓交流セミナーの意識調査を通して、一週間という短い時間だったが、参加者には互

いの文化を体験するだけではなく、お互いの文化も触れ合う中で相互理解を広げる機会になったと思われる。そして、グループ活動を行う過程で自分の考えも整理、深化させることができたようである。

２学期が始まった 10 月、セミナーに参加したお茶大生から「今度韓国でメンバーだった人が東京に来て会いました」と嬉しそうに話してくれ、私の心も温かくなった。今後も交流セミナーの機能を十分に活かし、グローバル時代の教育に貢献できる授業であることを望む。

【資料】アンケート用紙

【韓国文化について】

１～５のうち、あなた自身の気持ちに最も近いものに〇でかこんでください。

	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	少し そう思う	強く そう思う
1. 韓国に興味がある。	1	2	3	4	5
2. 韓国文化が好きだ。	1	2	3	4	5
→上の「質問2」についてお聞きします。あなたが思いつく「韓国文化」を５つ書いてください。	① ② ③ ④ ⑤				
3. 韓国文化に関する新しい知識・考え方を得たい。	1	2	3	4	5
4. 韓国文化についてもっと体験してみたい。	1	2	3	4	5
5. 日常的に韓国文化と触れる機会がある。					
→上の「質問4」で「4」または「5」に〇をした方にお聞きします。あなたは「韓国文化」に関する知識や話題をどのように入手しますか。あてはまる項目の数字を〇でかこんでください。(複数回答可)	1. インターネットサイト 2. 新聞や雑誌 3. 大学の講義 4. テレビ・ラジオ放送 5. 韓国の映画 6. 友達同士の会話 7. 旅行 8. その他(　　)				
6. 韓国文化を、理解するのはむずかしい。	1	2	3	4	5
7. 韓国文化は、日本文化と似ていると思う。	1	2	3	4	5
8. 「韓国の文化」といっても、韓国人個人個人の持つ文化はそれぞれ違うと思う。	1	2	3	4	5

【文化を学ぶ活動について】

※このページは留学生の方のみお答えください。

１～５のうち、あなた自身の気持ちに最も近いものを〇でかこんでください。

	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	少し そう思う	強く そう思う
1. 日本語学習と文化を学ぶ活動は、両方重要だ。	1	2	3	4	5
2. この日韓の文化を学ぶセミナーを通して、日本語の資料を読むことに慣れると思う。	1	2	3	4	5
3. セミナーを通して、言いたいことを日本語で表現する能力が向上する。	1	2	3	4	5
4. セミナーを通して、自分の生活に役立つ日本語の表現を知ることができる。	1	2	3	4	5
5. セミナーを通して、日本語を話す自信がつく。	1	2	3	4	5
6. セミナーによって、発言する人の日本語を、聞き取る能力が向上する。	1	2	3	4	5
7. セミナーによって、日本語で書く能力が向上する。	1	2	3	4	5
8. セミナーによって、自分の勉強に役立つ語彙を学ぶことができる。	1	2	3	4	5
9. 普段の日本語の授業よりも、このセミナーの方が、積極的に参加し日本語を使うと思う。	1	2	3	4	5
10. 日韓の文化を通して日本語を学ぶセミナーに、積極的に参加したい。	1	2	3	4	5

【文化をテーマとした国際交流セミナーについて】

１～５のうち、あなた自身の気持ちに最も近いものを〇でかこんでください。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	強くそう思う
1. 私は、この交流セミナーの中で日本文化を他の学生にわかりやすく伝えることができる。	1	2	3	4	5
2. 韓国人学生と日韓の文化を学ぶことで、日本文化についての新たな知識を得ることができる。	1	2	3	4	5
3. 韓国人学生と日韓の文化を学ぶことで、日本文化を違った角度で見ることができる。	1	2	3	4	5
4. この交流セミナーによって、積極的に他の学生と話す自信がつく。	1	2	3	4	5
5. 普段の授業よりも、この交流セミナーの方が積極的に授業に参加すると思う。	1	2	3	4	5
6. このような交流セミナーは、お互いの国の文化を学ぶのに有効だと思う。	1	2	3	4	5
7. このような交流セミナーをもっと多く経験したいと思う。	1	2	3	4	5

【日本社会・韓国社会のイメージについて】

１～５のうち、あなた自身の気持ちに最も近いものを〇でかこんでください。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	少しそう思う	強くそう思う
1. 日本社会は先進的だ。	1	2	3	4	5
2. 日本社会は規則を厳格に適用する。	1	2	3	4	5
3. 日本社会は集団の結束力が強い。	1	2	3	4	5
4. 日本社会は親しみやすい。	1	2	3	4	5
5. 日本社会は自由だ。	1	2	3	4	5
6. 日本社会はおだやかだ。	1	2	3	4	5
7. 日本社会は理解しやすい。	1	2	3	4	5
8. 日本社会はあたたかい。	1	2	3	4	5
9. 日本社会は男女平等だ。	1	2	3	4	5
10. 日本社会は変化しやすい。	1	2	3	4	5

1. 韓国社会は先進的だ。	1	2	3	4	5
2. 韓国社会は規則を厳格に適用する。	1	2	3	4	5
3. 韓国社会は集団の結束力が強い。	1	2	3	4	5
4. 韓国社会は親しみやすい。	1	2	3	4	5
5. 韓国社会は自由だ。	1	2	3	4	5
6. 韓国社会はおだやかだ。	1	2	3	4	5
7. 韓国社会は理解しやすい。	1	2	3	4	5
8. 韓国社会はあたたかい。	1	2	3	4	5
9. 韓国社会は男女平等だ。	1	2	3	4	5
10. 韓国社会は変化しやすい。	1	2	3	4	5

（セミナー前）

次の質問にお答えください。

１．なぜ今回の交流セミナーに参加することにしましたか。

２．今回の交流セミナーで何を得たいと思っていますか。

（セミナーの全体目標「文化リテラシー向上」を踏まえ自分なりの目標を考えてみてください。）

３．２の目標を達成するために、具体的にどのようなことをしようと思っていますか。

４．自分の国／相手の国の人間関係についてどのような印象を持っていますか？

自分の国の人間関係：

相手の国の人間関係：

５．　異文化を理解するためにはどのような姿勢が必要だと思いますか。

（セミナー後）

次の質問にお答えください。

１．交流セミナーの活動に関して

1.1 文化体験プログラム(8 月 6 日)で学んだこと、感じたことは何ですか。

②グループ実習(8 月 6～8 日)

・よかったこと：

・大変だったこと：

・機会があればまたグループ実習をしてみたいですか。（理由もお書きください）

①したい　　(　　)

②したくない (　　)

③討論・発表会(8 月 8 日)で学んだこと、感じたことは何ですか。

④ホームステイで学んだこと、感じたことは何ですか。

⑤ソラク山合宿(8 月 9 日～10 日)で学んだこと、感じたことは何ですか。

⑥その他の自由時間(日本語学校訪問も含む)で学んだこと、感じたことは何ですか。

２．セミナー全体に関して

・セミナーで最も有益だったと感じたことは何ですか。

・セミナーで有益でなかったと感じたことは何ですか。

・セミナーの改善点・ご要望などをお書きください。

3．韓国文化/日本文化について

3-1-1．セミナー前と後で自分の文化に対する考えが変わりましたか。どのように変わりましたか。

①変わった

セミナー前には・・・

セミナー後には・・・

②変わらなかった

3-1-2 上記①と答えた方にお聞きします。

なぜ考えが変わったと思いますか。何か具体的な理由やきっかけがありましたらお答えください。

3-1-3 上記②と答えた方にお聞きします。

なぜ考えが変わらなかったと思いますか。何か理由がありましたら簡単にお答ください。

3-2-1. セミナー前と後で相手の文化に対する考えが変わりましたか。どのように変わりましたか。

①変わった

セミナー前には・・・

セミナー後には・・・

②変わらなかった

3-2-2. 上記①と答えた方にお聞きします。

なぜ考えが変わったと思いますか。何か具体的な理由やきっかけがありましたらお答えください。

3-3-3. .上記②と答えた方にお聞きします。

なぜ考えが変わらなかったと思いますか。何か理由がありましたら簡単にお答ください。

4．セミナー前に自分が設定した目標を達成することができましたか。それはどうしてですか。

①よくできた②まあまあできた③どちらともいえない④あまりできなかった⑤できなかった

（理由：　　）

5．今回のセミナーに参加することで生じた、自分の中で考察を深めていきたい課題がありましたらご記入ください。

6．今回のセミナーで得たことを今後どのように生かしたいと思いますか。

最後に、あなた自身についてお聞きします。

（以下の質問は、統計的に処理されます。個人を特定するためのものではありません。）

※あなたのペンネーム_____

1.年齢：_____才

2.あなたのご所属に当てはまるものを〇で囲んで下さい。学部生の方は御所属をご記入ください。

a. 学部生　　学部　　学科　　専攻　　年

b.研究生　　c.科目等履修生　　d.聴講生　　e.その他

〇留学生の方にお聞きします。

3.あなたの日本語学習歴は何年ですか。（　）の中に数字をご記入ください。

(　　)年(　　)ヶ月

4.あなたの日本滞在歴を教えてください。（　）の中に数字をご記入ください。

(　　)年(　　)ヶ月

ご協力ありがとうございました。

総括

第 5 回日韓大学生国際交流セミナーを振り返って

石井　佐智子（お茶の水女子大学大学院生）

お茶の水女子大学と同徳女子大学校の交流セミナーは今年度で第 5 回を迎え、今回は 8 月 5 日から 12 日にわたって、韓国のソウルで行われた。

第 5 回日韓大学生国際交流セミナーに日本側アシスタントとして参加した立場から、本セミナーを振り返り、今回のセミナーの意義と共にアシスタントとしての課題を考えていきたいと思う。

まず、意義を考えるにあたり、本セミナーの特徴を挙げたいと思う。日韓大学生国際交流セミナーは例年、以下の 4 つの特徴を兼ね備えている。

（1）セミナーの約 3 ヶ月前から準備を始め、相手国の学生と渡航前から連絡を取り合う

（2）日韓混合のグループになり、グループ毎に協働で調査（野外実習）、発表を行う

（3）セミナー期間中、日本側の学生は韓国の学生の家でホームステイをする

（4）自由行動の時間も含め、全日発表グループのメンバー、及びホームステイ先の学生と共に行動する

今回は以上に加えて、（5）相手文化を直接体験する、個人・グループ間で交流することがより重視された。これらを実現するために、今年度は例年より教室内での活動時間が短縮され、グループ毎の野外実習の時間が多く設けられた。さらに、初めての試みとして 1 泊 2 日の全体合宿が組まれ、学生同士が共に過ごし、交流する機会も設けられた。

以上を踏まえて、今回のセミナーの意義を 2 点挙げる。

1 点目は自律性の重視である。今回は例年より野外実習の時間が長くなったため、自分たちがどこで何をし、何を学ぶか（野外実習の場所、内容）を自ら考え、決定することがより重視されたように思う。また、例年は見学先を紹介し、現地で集めた資料、調べた事をまとめて発表していたが、今回からは「何を体験し、何を思ったか」を述べることが求められた。野外実習の方向性が変わり、発表会で発表することではなく、「実習で自分たちが何をするか」がはっきりとした目標になったことで、スケジュールの組み立てをはじめ、学生が自律的にかかわることが明確に求められた回になったと感じた。

2 点目はグループ内の協働である。野外実習に重きをおき、合宿を設けたことで、今回はセミナーを通してグループが全体で取り組むように求められているように感じた。今年度から導入された合宿では、グループ毎に出し物をすることが事前に知らされていた。出し物を決める際にはお互いに話し合い、決定後は各グループで練習する姿も見受けられ、学生が協働を体現しているという印象を持った。

以下、アシスタントとしての課題を考えていきたい。

今回のセミナーでは自律性が重視され、グループ内での協働が求められているという印象を受けたが、今後これが方針として進められていくならば、学生の自律性を支え、協働が促進されるようにセミナーを補助していくのがアシスタントの課題であると思われる。本セミナーでは以上に加え、日韓の文化理解も不可欠であると考えられるが、今回は日本側から中国人学生の参加があった。今後は日韓という観点だけではなく、3 者間以上の交流という観点、より多文化的な視点が必要とされるようになると感じている。

総評

体験型交流セミナーの試み

金　榮敏（同徳女子大学）

韓日大学生国際交流セミナーは2004年に始まって以来、毎年成功裏に行われてきました。今年度で第5回目のセミナーでしたが、今までの交流セミナー以上にいい結果を出すことができました。今回は韓日大学交流セミナーを一段階レベルアップするために、第4回までの成果に基づき、いくつかの試みを行ってみました。発表中心だったグループ活動を野外活動・現場体験中心の体験型に変え、全体プログラムの中に短期間ではありますが、一泊二日間の合宿を取り入れました。セミナー前後に行われたアンケート調査を通して明らかになったように、準備の不十分さやハードなスケジュールなどからきた問題点も見られましたが、「より深い理解、体験ができた」とか「合宿を通してより親密になれた」といった意見も多かったことから、所期の目標は達成したように思います。

最近、日本語教育分野をはじめとする多様な分野において異文化理解、異文化コミュニケーションといった用語に接することが多くなりました。今やグローバル化が進み、全世界が一つの生活共同体になってきている中、異文化に対する理解は不可欠なものになっています。私自身それほど多くの異文化体験をしているわけではありませんが、異文化に対する理解というものは自分のものと異なるものに対して素直に認めてあげること、そしてお互いを知っていくために努力することであろうと思います。このような努力が重なることで真の異文化理解に近づいていけるのだと信じています。

我々の 韓日大学生国際交流セミナーも何よりも相手国の文化への理解を深めることを最大の目標としています。その目標をより具体的で実現可能なものにするために、そして身をもって体験できるものにするために、今回の韓日大学生国際交流セミナーを体験型交流セミナーにしてみたのです。一週間余りの短い日程ではありましたが、メールでの事前のやりとりなどによって決めておいた計画に沿って共に活動しながら、また合宿では共に生活しながら相手国の文化を身近に体験できたのではないかと思います。そして、このような体験が今後相手国の文化を理解するにあたって大きな力になってくれることと思います。

勿論、今回の体験型セミナーにおいても問題点はいくつか見られました。一番大きな問題点としては、同グループ内での事前準備、両校の学生間の意見交換が不十分だったことがあげられます。そのため、セミナー期間中のグループ活動をより効率的なものにすることができなかったと思います。意見交換がメールだけで行われていたことが主な原因であるでしょう。また、体験中心のセミナーにした結果、報告会の準備がおろそかになり、報

告会が思ったほど活発に行われなかったという問題もありました。なお、教員を含め担当スタッフのより細密なチェックやサポートが求められるということも指摘できると思います。

今回の交流セミナーの成果と反省点を踏まえて、次回からのセミナーをより意義ある、楽しいセミナーにしていくことを期待しています。

総評

日韓の真の対話と交流への重要な新たな一歩

森山　新（お茶の水女子大学）

今年２月に訪韓した際、同徳女子大学のセミナー担当、金榮敏（キムヨンミン）先生との間で、今回は研究発表型ではなく体験型のセミナーを行うことを決めた。それは両国の学生が直接会い、１週間以上の時をともに過ごす点を最大限生かすには、教室で両国の文化を知識として学ぶのではなく、体験に基づく共同研究（フィールドワーク）と共同生活（ホームステイ、合宿）の中で、人間関係や、コミュニケーション、生活習慣に関わる様々な文化の異同に気づき、それを対話の中でいかに理解していくかといった点を重視したためであり、そこで求められる能力（文化リテラシー）こそ、多文化が共生するグローバル時代にあって何よりも求められる重要な能力であると考えたからである。

そのため、今回、両国学生間の対話はセミナー前の準備の段階から始まった。テーマや野外実習内容の決定を日韓のグループ間でメールやインターネットの掲示板などを通じて行った。そこには国内のメールのやり取りではほとんど問題にならない言語の問題や文字化けの問題などが発生したが、それこそが国境を超えた対話の第一の障壁であることを実感できたと思うし、同時にそれを克服する中で、海外の学生との交流や情報の交換を日常的に行う道が開かれる。また今回のセミナー初日の出会いは今までのような出会いではなく、今までメールを通じてヴァーチャルに交わってきた相手に直に触れる瞬間でもあった。

野外実習についてもこのような事前の話し合いがあったために、テーマを考える上でどこを訪問するのがよいのか、どのような準備が必要か、などについて、より深く検討することができたため、より有意義な実習の時間となったのではないかと思う。

このような十分な事前準備があったこともあり、折からの猛暑の中にあってもそれに負けずに予定した日程を消化して行けたのではないかと思う。

また今回はホームステイに加え１泊２日の合宿も行い、全員が同じ部屋に泊まり、心行くまでディスカッションする時間も与えられた。後半に１泊２日の合宿を加えたために報告会を準備する時間が十分にとれず、実習で得た貴重な体験と学びを他のグループと交換し共有することは十分できなかったことは少し残念であったが、その代わりグループ内では今まで以上に深いところまでの学びに至り、相互理解できたのではないかということを発表の中で感じることができた。討論を深めるには、意見の対立や、答えにくいことにあえて答えていかなければならないつらさ、自身の気持ちや立場が十分に相手に分かってもらえないやるせなさ、外国でマイノリティの立場で討論を行う難しさなど、様々な困難を感じることもあったようである。しかし今回はそれを越えていく努力と勇気がうかがえたことは何よりもの喜びであった。合宿の夜のパーティーでの学生たちの姿には、何か今まで覆っていた心の壁が取り払われた解放感と達成感が感じられ、その表情はすがすがしい

ものがあった。

意見の異なる相手に対して自身の考えを述べ、議論を行っていくことが比較的少ない日本の学生たち、また人間関係に比較的距離を置く傾向のある日本の学生たちが、このように日々生活をともにしながら、意見を述べ合っていく経験は、グローバル時代に生きる学生たちにとってとても貴重な経験であったかと思う。

合宿の中で何人かの韓国の学生に、日本の学生と接してどんなことを感じたかと非公式に尋ねたところ、自分は今まで授業を通じて、日本人はなかなか心を開かない、距離が縮まって親しくなれないと思っていたが、今回接した日本の学生たちはそうではなかったといったことを皆が共通に強調していた。ここには他文化を知識として学ぶことの限界と、人と人との出会いを通して学ぶことの大切さを物語っている。同時に今回、日本側の学生が自身の壁、文化の壁などを乗り越え、対話の努力を惜しまなかった証でもあると思う。訪韓前に、韓国では人と人との距離をこれまでの半分にしてほしい、遠慮という言葉をしばし忘れて積極的になってほしいといった指導を行っていたが、学生たちがそれを実行に移してくれたことは喜ばしいことであった。いや、もしかしたら、韓国の学生たちの親身な姿に感動し、そこからの学びの結果であったのかもしれない。そうであるとすれば、今回の体験型学習のもう一つのゴールである人間関係について学び合い、理解し合い、尊敬し合うといった点も達成できたのではないかと思う。

韓国側の学生も炎天下の中、日本の学生とほんとうに親身になって接してくれた。１年生もいる、日本語学科以外の学生もいる中、韓国の学生の日本語力は決して言いたいことを自由に言えるというものではない中で、それでも相手の気持ちを理解し、自身の気持ちを伝えようと苦労しながらコミュニケーションを行う姿は、ほんとうに感動せざるを得ない。今回の体験を通じて韓国の学生たちももっと日本語を学ぼうと思ったであろうし、日本の学生たちも韓国の学生がこうして日本語を駆使する姿に触れながら、自分も英語だけでなく隣国の言葉を学ばなくてはと思ったに違いない。

合宿の帰りソウルに向かうバスの中で、今回のセミナーの反省と、来年のセミナーのことを考えた。日韓の学生たちに安全を確保と最大限の充実感を与えるため、スタッフ一同万全の準備と体制で臨んだつもりであったが、終わってふり返ると改善点も残されている。それらを克服し、来年どのようにしたら今回の韓国側の歓迎に応えられるのか、どうしたら今回のセミナーの成功をさらに発展させることができるのか。

難しい問題である。１年間じっくりと考え、さらに内容の濃いセミナーにしていけたらいいと思う。

最後になったが、夏休みの最中、私たちお茶大の学生、教員を迎えてくださった、同徳女子大学の総長、金榮敏先生をはじめとした日本語科の先生や院生の方々、参加した学生の皆さん、ホームステイのご家族の皆さんに心から感謝の意を表したい。

学び、そして教え合った

日韓の真の対話と交流を求めて
～2008 年第５回日韓大学生国際交流セミナー報告書～

発行年月日　2009 年 1 月 31 日
発　　行　お茶の水女子大学グローバル教育センター・グローバル文化学環
住所　〒112-8610　東京都文京区大塚 2-1-1
電話＆FAX　03-5978-5965
http://jsl.li.ocha.ac.jp/index.html
発行 協力　同徳女子大学外国語学部日本語学科
住所　〒136-714　ソウル特別市城北区月谷洞 23-1
電話　02-940-4370　FAX　02-940-4191
編　　集　森山新（お茶の水女子大学）
印　　刷　よしみ工産

第５回日韓大学生国際交流セミナー